

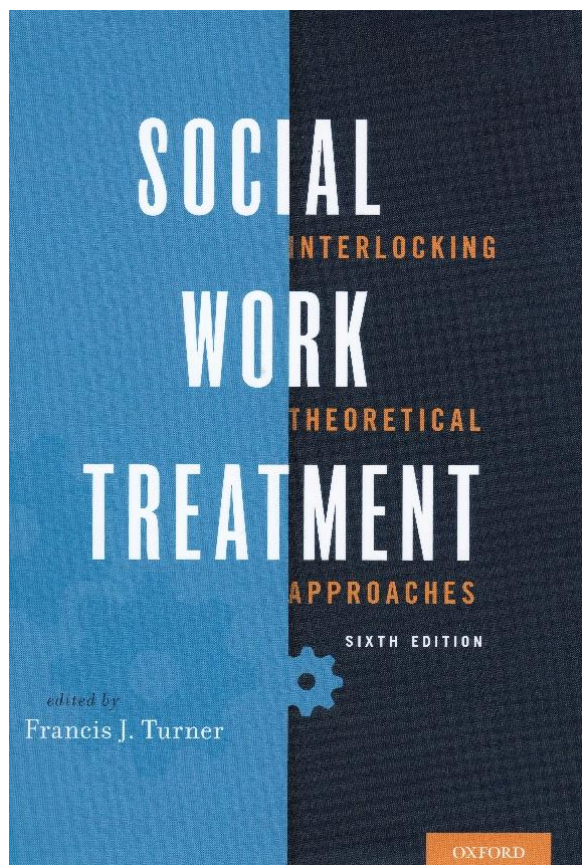
ターナー編著『ソーシャルワーク・トリートメント』を読む
－ 38の“理論”とは何か －

北島 英治

目 次

資料1 『ソーシャルワーク・トリートメント (<i>Social Work Treatment</i>)』第6版(2017年)の「表紙」、「目次」	(2頁)
資料2 ソーシャルワーク・トリートメントの変遷(『ソーシャルワーク研究(第5号)』元原稿から)	(6頁)
資料3 『ソーシャルワーク・トリートメント(2017年)』(上田洋介翻訳・北島英治監訳の原稿から各理論の最初の部分抜粋)	(17頁)

資料1 『ソーシャルワーク・トリートメント (*Social Work Treatment*)』第6版(2017年)の「表紙」、「目次」



目 次

1. Attachment Theory and Social Work Treatment 1
Timothy Page
2. Chaos Theory and Social Work Treatment 23
Sandra Loucks Campbell
3. Client-Centered Theory and the Person-Centered Approach: Values-Based, Evidence-Supported 34
William S. Rowe
4. Cognitive Behavior Theory and Social Work Treatment 54
Ray J. Thomlison and Barbara Thomlison
5. Cognitive Theory and Social Work Treatment 80
Pranab Chatterjee and Suzanne Brown
6. Constructivism: A Conceptual Framework for Social Work Treatment 96
Donald E. Carpenter and Keith Brownlee
7. Social Work Theory and Practice for Crisis, Disaster, and Trauma 117
Diane M. Mirabito
8. Ecopsychology: Adding “Eco” to the Biopsychosocialspiritual Perspective 131
David S. Derezotes
9. Empowerment Approach to Social Work Treatment 142
Judith A. B. Lee and Rhonda E. Hudson
10. Existential Social Work 166
Donald Krill
11. Feminist Theory and Social Work Practice 191
Eveline Milliken
12. The Four Forces: An Inclusive Model 209
Au-Deane Shepherd Cowley
13. Functional Theory and Social Work Practice 223
Katherine M. Dunlap
14. General Systems Theory 240
Nancy Riedel Bowers and Anna Bowers

15. Gestalt Theory and Social Work Treatment 248
Elaine P. Congress
16. Hope Theory and Social Work Treatment 266
Alexander T. Polgar
17. Hypnosis and Clinical Social Work Practice 276
Elayne Tanner
18. Life Model of Social Work Practice 287
Alex Gitterman
19. Meditation and Social Work Practice 302
Thomas Keefe
20. Mindfulness and Social Work 325
Kirstin Bindseil and Kate Kitchen
21. Narrative Theory and Social Work Treatment 338
Patricia Kelley and Mark Smith
22. Neurolinguistic Programming Theory and Social Work Treatment 351
G. Brent Angell
23. Oppression Theory and Social Work Treatment 376
Susan P. Robbins
24. Problem-Solving and Social Work 387
Micheal L. Shier
25. The Psychoanalytic System of Ideas 398
Elizabeth Ann Danto
26. The Psychosocial Framework of Social Work Practice 411
Emilia E. Martinez-Brawley and Paz M.-B. Zorita
27. Relational Social Work: A Contemporary Psychosocial Perspective on Practice 420
Carol Tosone and Caroline Rosenthal Gelman
28. Relational Theory and Social Work Treatment 428
Dennis Miehl
29. Resilience Theory and Social Work Practice 441
Robbie Gilligan
30. Role Theory and Concepts Applied to Personal and Social Change in Social Work Treatment 452
Dennis Kimberley and Louise Osmond
31. Social Learning Theory and Social Work Treatment 471
Bruce A. Thyer
32. Social Networks and Social Work Practice 481
Elizabeth M. Tracy and Suzanne Brown
33. Social Work Practice in the Time of Neuroscience 497
Robert J. MacFadden
34. Socially Constructing Social Work 504
Dan Wulff

35. Solution-Focused Theory	513
<i>Mo Yee Lee</i>	
36. Task-Centered Social Work	532
<i>Anne E. Fortune and William J. Reid</i>	
37. Trauma-Informed Social Work Treatment and Complex Trauma	553
<i>Dennis Kimberley and Ruth Parsons</i>	
38. Emerging Theories: Electronic Exchanges	574
<i>Emilia E. Martinez-Brawley</i>	
Epilogue: <i>Social Work Treatment</i> , Sixth Edition: Some Final Comments	586

資料2 ソーシャルワーク・トリートメントの変遷 (『ソーシャルワーク研究(第5号)』元原稿から)

—ソーシャルワーク・トリートメントの変遷—

1. はじめに

ターナー先生との出会いを思い出します。もうだいぶ前になりますが、日本でのNTT主催の講演をお願いしたことがあります。ターナー先生の編纂となる『ソーシャルワーク・トリートメント：相互連結理論アプローチ(*Social Work Treatment: Interlocking Theoretical approach*)』の初版は1974年に出版されました。それから約50年がすでに過ぎました。第2版(1979年)、第3版(1986年)、第4版(1996年)と出版され、この版は翻訳されています⁽¹⁾。2011年に第5版、そして、最新の2017年の第6版は日本語出版が予定されています。振り返って、初版編纂でとりあげられた理論は、精神分析、自我心理学、心理社会療法他、全14種類でしたが、2017年の第6版では、ターナー先生が選定した理論は38種類に及んでいます。

1974年	第1版	14理論	
1979年	第2版	19理論	
1986年	第3版	21理論	
1996年	第4版	27理論	(日本語に翻訳)
2011年	第5版	36理論	
2017年	第6版	38理論	(日本語に翻訳予定)

ターナー先生は2019年に90歳で亡くなられたということを知りました。今でも東京での講演会場へ同乗したタクシーの中で、「わたしはホリス先生に教わりました」と話されたのをはっきりとおぼえています。その時、フローレンス・ホリス(Florence Hollis)の流れをくむ生粋のケースワーク診断主義派ではないかと思いました。なぜなら、ターナー先生が師事したフローレンス・ホリスは、『ケースワーク：心理社会療法(Casework: Psychosocial Therapy)』⁽²⁾と銘打って1964年に出版しています。ケースワーク診断主義の金字塔とも言うべき貴重なものです。精神分析、特に自我心理学を基本理論とし、「第1部、理論的枠組み(The Theoretical Framework)」、「第2部、処置：技法手続きの分析(Treatment: An Analysis of Procedures)」、「第3部、診断と処置計画(Diagnosis and Treatment Planning)」と構成されています。その中で、“Treatment(処置)”という言葉はふだんに使われています。邦訳は1966年、現代精神分析双書のひとつとして出版されました⁽³⁾。

この“Treatment(処置/処遇)”という言葉は、ケースワーク、その後のソーシャルワーク発展の歴史の中で、北米においても我が国においても、“クライアントを処置、あるいは

は処遇する”という権威的ニュアンスがあるとして早くから禁句となり、“**Social Work Practice** (ソーシャルワーク・プラクティス)”として統一されていったという歴史的な経緯があります。ターナー先生はこの言葉を初版から50年間、一貫して使い通したのです。そこに、ターナー先生のケースワークへの思い入れと人生哲学のようなものをわたしは感じています。

そこで、『ソーシャルワーク・トリートメント』の特徴と、ソーシャルワークの歴史的発展の中にしめる立ち位置をわたしなりにまとめておきます。1) 精神分析や自我心理学を基盤とするケースワーク診断主義派を起点として編纂されてきた。2) “トリートメント (処置/処遇)”の語句にこめられた“ケースワーク治療 (therapy)”の理論であり技術である。リッチモンドの言う環境や状況に対する間接援助活動 (indirect activity) ではなく直接援助活動 (direct activity)、つまり一対一の人間関係による“・・・to develop personality”であり、それは“individual by individual”の「個人変容 (individual change)」の方法 (method) であり過程 (process) として編纂されている。3) ソーシャルワークを従来、ケースワーク (個人援助)、グループワーク (集団援助)、コミュニティー・オーガニゼーション (地域援助)、ソーシャル・アドミストレーション (組織管理)、そしてソーシャル・アクションといった、その統合化 (generic) が発展する以前の従来の範疇化 (specific) における“ケースワーク (個人援助)”が主体となる編纂となっている。裏返して言うと、集団、組織、地域、ソーシャル・アクションについてのことはほとんど含まれていない。そして、最も重要なこととして、4) 現代のグローバル定義にあるソーシャルワーク・プラクティスにおける「社会変革 (social change)」を目的とし、その基盤となる“人権”“社会正義”といった専門価値 (values) と原則 (principles) 等はほとんどふれられていません。

最後に、見過ごしてしまいがちなすべての版の表紙のサブタイトルに挙げられている“**Interlocking Theoretical Approach**”について述べておきます。最新の第6版の「序」に次のように書いています。唯一絶対の“ケースワーク”や“ソーシャルワーク”を追い求めるのは終わりして、新たに生まれ、批判を受け、あるいは評価され、発展し変化し続ける専門知識であり、専門性であり、専門職であることを認めようと言っているように私には思えます。

ターナー先生によって編纂されてきた“理論”を奇異に感じ、拒絶したくなるものも含まれているかもしれません。またその効果の実証や評価が定まっていないものが多くあることを認めながら、その上で、それぞれの“理論”を“まぜこぜにして自己流に変更する”、あるいは、“ある理論だけを権威づける”ということを強く戒め、それぞれの“理論”を、そのあるがままに理解し修得し、状況に応じて、“**Interlocking** (連結/連動)”していった欲しいという強い思いがこめられているのようには感じられます。

2. 『ソーシャルワーク・トリートメント (*Social Work Treatment*)』第5版 (2011年) の特徴

ここでは、『ソーシャルワーク・トリートメント (*Social Work Treatment*)』第5版 (2

011年)を見ることにします。表()に目次を示しておきます。全体としては38の論文から構成されています。ターナーの最初と最後の本書に関する二つの説明の章を除くと、36種の理論が示されています。

表() 36の理論的アプローチ(2011年)

-
1. **Aboriginal Theory: A Cree Medicine Wheel Guide for Healing First Nations**
アボリジナル理論：ファースト・ネーションズを癒すためのクリー・メディスン・ウィール・ガイド
 2. **Attachment Theory and Social Work Treatment**
アタッチメントとソーシャルワーク・トリートメント
 3. **Chaos Theory and Social Work Treatment**
カオス理論とソーシャルワーク・トリートメント
 4. **Client-Centered Theory: The Enduring Principles of a Person-Centered Approach**
クライアント中心理論：パーソン中心アプローチのエンデュアリング原理
 5. **Cognitive Behavior Theory and Social Work Treatment**
認知行動理論とソーシャルワーク・トリートメント
 6. **Cognitive Theory and Social Work Treatment**
認知理論とソーシャルワーク・トリートメント
 7. **Constructivism: A Conceptual Framework for Social Work Treatment**
コンストラクティビズム：ソーシャルワーク・トリートメントのための概念枠
 8. **Crisis Theory and Social Work Treatment**
危機理論とソーシャルワーク・トリートメント
 9. **Ego Psychology and Social Work Treatment**
自我心理学とソーシャルワーク・トリートメント
 10. **Empowerment Approach to Social Work Practice**
エンパワーメント・アプローチとソーシャルワーク・プラクティス
 11. **Existential Social Work**
実存的ソーシャルワーク
 12. **Feminist Theory and Social Work Practice**
フェミニスト理論とソーシャルワーク
 13. **Functional Theory and Social Work Practice**
機能的理論とソーシャルワーク・プラクティス
 14. **General Systems Theory: Contributions to Social Work Theory and Practice**
一般システム理論：ソーシャルワーク理論とプラクティスへの貢献
 15. **Gestalt Theory and Social Work Treatment**
ゲシュタルト理論とソーシャルワーク・トリートメント

16. Hypnosis and Social Work Practice: Incorporating New Perspectives from Neuroscienc
催眠とソーシャルワーク・プラクティス
17. Advance in the Life Model of Social Work Practice
ソーシャルワーク・プラクティスのライフモデルにおける前進
18. Meditation and Social Work Practice
メディテーションとソーシャルワーク・プラクティス
19. Narrative Theory and Social Work Treatment
ナラティブ理論とソーシャルワーク・トリートメント
20. Neurolinguistic Programming Theory and Social Work Treatment
ニューロ・リングイスティック・プログラム理論とソーシャルワーク・トリートメント
21. Oppression Theory and Social Work Treatment
オプレッション理論とソーシャルワーク・トリートメント
22. Postmodern Social Work
ポストモダン・ソーシャルワーク
23. Problem Solving and Social Work
問題解決とソーシャルワーク
24. Psychoanalysis and Social Work: A Practice Partnership
精神分析とソーシャルワーク：プラクティスのパートナーシップ
25. Psychosocial Theory and Social Work Treatment
心理社会理論とソーシャルワーク・トリートメント
26. Relational Theory and Social Work Treatment
関係理論とソーシャルワーク・トリートメント
27. Role Theory and Concepts Applied to Personal and Social Change in Social Work
役割理論とその概念のソーシャルワークにおける個人と社会変容への応用
28. Self-Efficacy Theory
セルフ・エフィカシー理論
29. Social Learning Theory and Social Work Treatment
社会的学習理論とソーシャルワーク・トリートメント
30. Social Networks and Social Work Practice
ソーシャル・ネットワークとソーシャルワーク・プラクティス
31. Solution-Focused Theory
ソーリューションフォーカス理論
32. Some Basic Ideas About the Strengths Perspective
ストレンクス・パースペクティブの幾つかの基本的考え
33. Strategic Therapy and Social Work Intervention

34. Task-Centered Social Work

課題—中心ソーシャルワーク

35. Transactional analysis Theory and Social Work Treatment

交流分析理論とソーシャルワーク・トリートメント

36. Transpersonal Social Work: An Integrative Model

トランスパーソナル・ソーシャルワーク：統合的モデル

(以上記載 36 項目は原書の目次 38 項目のターナー筆の 2 つの章が除いてある)

最初の“理論として「Aboriginal Theory: A Cree Medicine Wheel Guide for Healing First Nations」が掲げられています。”これを“Aboriginal Theory (アボリジナル理論)”と言い、先住民の“神話”に関するものです。これを見たとき、不思議な感じをもったのを今でも覚えていますが、むしろ“神話”が、なぜ“理論”なのであろうか、なにかの間違いではないかという疑い心でした。読みながら、少しずつ自分の中で気が付いてきたことがあります。それは自分へのあらたな発見であり、この本の真の意味への気づきでもありました。“理論”というと、いつのまにか自分の中で実証された“科学的理論”を前提にして思い描いていたことに気が付いたのです。

ケースワークやソーシャルワークは、リッチモンドの 1917 年に出版される『社会診断』(Social Diagnosis) 以来、サイエンティフィック・チャリティー (scientific charity) として出発し、1922 年にまとめられた“ソーシャルワ・ケースワークとは何か? (What is Social Case Work?)”では、“ケース (case)”と“ワーク (work)”からなる造語として“ケース・ワーク (case・work)”と呼ばれた。そのことばが専門用語“ケースワーク (ケースワーク)”として定着してきたという歴史的経緯があります。その後、“ソーシャル・ケースワーク (social casework)”、“ソーシャル・グループワーク (social groupwork)”、“コミュニティ・ワーク (community work)”等に専門性が発展するとともに、それらが乖離していきました。その反省から、“ケース (case)”、“グループ (group)”、“コミュニティ (community)”の言葉が取り外され、“ソーシャルワーク (social work)”へと統合され、現在では“ソーシャルワーク・プラクティス (ソーシャルワーク・プラクティス (social work practice))”として定着してきたのです。

つまり、リッチモンドの『診断 (diagnosis)』は医学用語が用いられるという、その“医学モデル (medical model)”が、その基盤にあります。“サイエンティフィック・チャリティー (scientific charity)”という“サイエンス (科学)”への標榜と、その後の発展が、以前、ヨーロッパでおきた“ルネサンス”と同じように、大きな時代的転換期であり、それは“モダン”と呼ばれる新しい時代への突入でした。特にヨーロッパを中心にして、人口増加と人口移動と、それに伴う工業化、産業化、都市化が進み、一方では富める者が拡大し、他方では貧困と都市の中でのスラム化がすすみ、未曾有の経済発展が始まっていく特異な

時代背景が、リッチモンドが生きた時代であったといえるでしょう。まさに科学技術の幕開けであり、“モダン”時代の到来でした。

3. 従来のソーシャルワークと革新的ソーシャルワークの理論の融合

『ソーシャルワーク・トリートメント』が、現在の『ソーシャルワーク・プラクティス』の中で、どのような位置にあるかを見ておきましょう。ムラリー (Mullaly、2007年) は、『新構成ソーシャルワーク』の中で、従来 (conventional) のソーシャルワーク理論と革新的 (progressive) なソーシャルワークに分けて分類しています(表)。

表 () 従来のと革新的ソーシャルワーク・プラクティスの視点/アプローチ

従来の (Conventional)		革新的 (Progressive)
個人変革	環境の中の個人 (個人変革、そして/ あるいは限定的社会変革)	根本的社会変革/変換
精神力動 行動変容 クライアント中心 クライアント中心 臨床的 家族療法 ケースワーク	一般システム理論 エコ・システム (生態学的) ライフ・モデル 問題解決 ストレングス視点	フェミニスト・ソーシャルワーク マルクス主義・ソーシャルワーク ラディカル・ソーシャルワーク 構造的ソーシャルワーク 反人種主義的ソーシャルワーク 反抑圧的ソーシャルワーク 批判的ポストモダン・ソーシャルワーク ポスト植民地主義 ナラティブ・セラピー 正義セピー

Bob Mullaly (Third Edition) (2007). *The New Structural Social Work*. Oxford University Press. (Page 48) ⁽⁴⁾

第5版の『ソーシャルワーク・トリートメント』の目次を見ると、ムラリーの表の中の区分としての「従来のソーシャルワーク理論」と「革新的ソーシャルワーク理論」において、前者だけでなく、第4版以前には見られなかった後者に属するものもが含まれるようになってきたという特徴があります。それらの“理論”を、表 () の中でハイライトをつけておきました。たとえば、フェミニスト理論、コンストラクティビズム：ソーシャルワーク・トリートメントのための概念枠、ナラティブ理論、オプレッション理論、ポストモダン・ソーシャルワークがあります。新しい版において、「従来のソーシャルワーク理論」と「革新的ソーシャルワーク理論」の融合がみられます。しかしながらそれら以外に、ハイライトをつけた“理論”として、アボリジナル理論、カオス理論、催眠、メディテーション、ニュー

ロ・リングイスティック、セルフ・エフィカシー理論、ストラテジック理論、トランスパーソナルがあります。

ここでもう一度、本書の最初の“理論”である“Aboriginal Theory (アボリジナル理論)”と言いながら、先住民の“神話”に関するものであることに不思議な感じをもち、“神話”が、なぜ“理論”なのか、なにかの間違いではないかという私の疑い心にもどってみましょう。また、この第5版の本の中では、「催眠」があり、第6版では「瞑想」、「マインド・フルネス」、「カオス理論」等が出てきます。これらの“理論”がいったい“ソーシャルワークなのか”と疑い心がより深まってきます。それに答えるかのように、最後の版である第6版の『ソーシャルワーク・トリートメント(2017年)』上田洋介翻訳・北島英治監訳原稿から抜粋)に、次のように書き残しています。

(序文からの抜粋)

プラクティスの世界では、明らかに、ソーシャルワーク・プラクティスの複雑さと受け継がれてきた課題が認識されるに至っている。以前は、理論群を学術的に比較する形で紹介していたが、今では、理論群を理論的な資源群と見なすことに抵抗がなくなっている。すなわち、本書のような分類を、プラクティショナーが利用できる資源についての議論として紹介することができるようになったのである。個々の理論は、特定のケースでの利用の有無を自由に選択することができる、中立的な資源と見なされる。

今のところ、我々は本書の 38 の理論群と、その状況に応じた使い分けについて、評価方法を見出すには至っていない。これをいかにして実現するかは、専門職が直面している課題である。一方、我々は、プラクティショナーがその経験を我々と共有してくれるように促すことにより、各理論がいかなる状況でどのように活用されているかに関するデータの収集を始めようとしている。

フランシス・J・ターナー

Francis J. Turner

科学技術の幕開けと、その“モダン”時代を生きてきた私たちの中に、先に引用したターナー先生の本書編纂理由としての言葉を繰り返してみますと、「50年というのは長いものである。本書はこの50年間に5度の改版を経て、これが第6版である。本書の制作が開始されたのは、我々の専門職の歴史の中で、それまで続けられていたソーシャルワーク・プラクティスのための単一の理論を探求する取り組みが終わったときだった」はずですが、いつのまにか“ソーシャルワーク・プラクティスのための単一の理論を探求する取り組み”を、今なを求めつづけている自分があることに気づいたのです。まさに、ターナー先生が編纂してこられた各種“理論”は、“ソーシャルワーク・トリートメントの理論”として、「今のところ、我々は本書の 38 の理論群と、その状況に応じた使い分けについて、評価方法を見出すには至っていない。これをいかにして実現するかは、専門職が直面している課題である。一方、我々は、

プラクティショナーがその経験を我々と共有してくれるように促すことにより、各理論がいかなる状況でどのように活用されているかに関するデータの収集を始めようとしている」という、フランシス・J・ターナーからの“私たちに与えられた宿題”であり、これら理論に裏付けられたプラクティスと、そのプラクティスに裏付けられたリサーチを実行していくことで、“私たち自らが答えていく”ことなのでないでしょうか。

文献

(1) (フランシス・J・ターナー編纂『ソーシャルワーク・トリートメント (上) (下)』米本秀仁監訳、中法法規、1999年)

(2) (Florence Hollis (1964). *Casework: A Psychosocial Therapy*. Random House.

) (3) (フローレンス・ホリス著『ケースワークー心理社会療法 (現代精神分析双書6)』本出祐之、黒川昭登、森野郁子訳、岩崎学術出版、1966年)

(4) Bob Mullaly (Third Edition) (2007). *The New Structural Social Work*. Oxford University Press. (Page 48)

(『ソーシャルワーク研究(第5号)』の元原稿から)

資料3『ソーシャルワーク・トリートメント(2017年)』(上田洋介翻訳・北島英治監訳の原稿から各理論の最初の部分抜粋)

序文

「50年というのは長いものである。本書はこの50年間に5度の改版を経て、これが第6版である。本書の制作が開始されたのは、我々の専門職の歴史の中で、それまで続けられていたソーシャルワーク・プラクティスのための単一の理論を探求する取り組みが終わったときだった。むしろ、少なくとも世界のこの地域では、ソーシャルワークの「心理社会的」要素がこの専門職にはより適合していると認識されるに至っていた。

我々の専門職が対象領域と認識を拡大するにつれ、社会科学の多くの側面の重要性と豊かさへの評価も高まった。こうして、ソーシャルワーク専門職で多様な学派のサイコセラピーが応用されることが増え、これに対する関心が増した。現在、我々の関心は、多様な学派の知識やスキルをソーシャルワークのトリートメントやプラクティス、関連リサーチに取り入れることにある。こうして、心理学と社会学の思想体系が理論的基礎となり、そこから専門職が教育、プラクティス、リサーチの世界にその資質を示すようになったのである。この展開に影響を与えた教育的要因の一つとして、さまざまな重要な社会学的要因により、専門職がより広い規模で大学の世界に進出していたという現実がある。すなわち、多くの学生が修士・博士のレベルで学問体系に登録されていたということである。ソーシャルワーク教育が学士レベルやコミュニティ・カレッジのレベルに移行したのは、もっと先のことである。

ソーシャルワーク教育は、初期の段階から、大学レベルのリサーチ課題に強い関心を持ち、献身的にこれに取り組んできた。ソーシャルワーク・リサーチの豊かさと、教育とプラクティスの影響は、本書に反映されているように、過去から現在に至るまで変わらず劇的なものである。それは、研究とそこから生まれる出版物のための豊かな土壌を作り出してきた。

我々の専門職にとっての現在進行中の課題の1つは、重要なリサーチとプラクティスにおける発見を、いかにして便利で効果的な形でプラクティショナーや研究者の手に届けるかということであり、それは今後も変わらない。本書とその各版の制作および計画に取り組むにあたり、我々が有用だと考えた進め方は、研究者仲間(本書で取り上げた38の理論のそれぞれを紹介するのに相応しいと認められている人々)を招き、特定のプラクティス理論の最新の要約をプレゼンテーションしてもらい、特定の理論に関わる最新の参考資料一覧を付加してもらうというものである。

このようなプロセスで、我々はこれまでに全6版の刊行に至った。初期の版において、我々は、プラクティスに活用されている全範囲を包含することを目標の一つと考えていたが、その後、各版は、プラクティショナーやリサーチャーを教育する際に有用と思われる形で、前版を更新したものとなっている。

プラクティスの世界では、明らかに、ソーシャルワーク・プラクティスの複雑さと受け継がれてきた課題が認識されるに至っている。以前は、理論群を学術的に比較する形で紹介していたが、今で

は、理論群を理論的な資源群と見なすことに抵抗がなくなっている。すなわち、本書のような分類を、プラクティショナーが利用できる資源についての議論として紹介することができるようになったのである。個々の理論は、特定のケースでの利用の有無を自由に選択することができる、中立的な資源と見なされる。

今のところ、我々は本書の 38 の理論群と、その状況に応じた使い分けについて、評価方法を見出すには至っていない。これをいかにして実現するかは、専門職が直面している課題である。一方、我々は、プラクティショナーがその経験を我々と共有してくれるように促すことにより、各理論がいかなる状況でどのように活用されているかに関するデータの収集を始めようとしている。

フランシス・J・ターナー

Francis J. Turner

1. Attachment Theory and Social Work Treatment

愛着理論とソーシャルワーク・トリートメント

Timothy Page

「愛着理論は 20 世紀半ば、ロンドンのタビストック・クリニックで子どもと親部門の部長だった英国人の精神科医ジョン・ボウルビィにより構築された。ボウルビィが愛着理論を初めて発表したのは、1957 年から 1959 年にかけて毎年 1 回行われたロンドンでの英国精神分析学会の会合においてであった (Bretherto, 1992)。この画期的な講義はアンナ・フロイト、メラニー・クライン、ドナルド・ウィンコットといった当時の精神分析界の権威たちを前にして行われた。人間の発達やサイコセラピーに対する彼らの考え方は、フロイト派精神分析理論に深く根差したものだ。」

2. Chaos Theory and Social Work Treatment

カオス理論とソーシャルワーク・トリートメント

Sandra Loucks Campbell

サンドラ・ルークス・キャンベル

「カオス理論

現代数学から生まれたカオス理論は、システムは常に崩壊の途上にあり、人間は混沌とした社会的現実の中で創造的な新しい存在として生まれ変わり得るとする。この現代世界にカオスが存在することについては議論の余地はなからう。ソーシャルワーカーが働く現場は他のどこにも増してこれが当てはまる。幾層にも折り重なったプラクティスのコンテキストはカオスに満ちている。ソーシャルワーカーは、ただでさえ支援を求める人々の増加や新しい管理モデル、政府予算の削減と格闘しているが、複雑さが増

すことでさらにプレッシャーを受けることになる。現代世界では、伝統的な階層構造に基づく働き方は機能しておらず、ソーシャルサービスや医療サービスのネットワーク化が極限まで進んでいる。このような進歩に伴い新たな要求が生じ、労働時間も増え、ソーシャルワーカーはますます困難な対応を強いられている。結果的にそのしわ寄せを受けるのは、サービスを受ける側の人々である。

我々は生活のあらゆる側面において秩序と統制を求めるが、予測不能性がなくなることはない (Tarnas, 1991)。カオス理論(「複雑性理論」とも呼ばれる)は、まさにこのような予測不能性から生まれた。我々人類は不均衡と予測不能性、すなわちカオスの中で創造し存在するのである。カオス理論は、統制を求めるという人間の傾向に対し、さらには、アイザック・ニュートン(Issac Newton, 1729)やマックス・ウェーバー(Max Weber, 1947)の研究に対し、興味深い矛盾を提起する。この比較的新しい理論を知ることで、ソーシャルワーカーは、個人や家族、グループ、組織、コミュニティとのワークにおいて、これまでなかった新たな視点を持つことができる。本章ではカオス理論とその起源について解説し、21世紀のソーシャルワーカーがこの理論を応用するためのアイデアを提示する。」

3. Client-Centered Theory and the Peron-Centered approach: Values-Based, Evidenncce-Supported

クライアント中心理論と人間中心のアプローチ：

価値を基礎とし、エビデンスに支持されたプラクティス

ウィリアム・S・ロー (William S. Rowe)

「カール・ロジャーズの研究を土台として発展した「クライアント中心」理論(現在は「人間中心」理論と呼ばれる)は、人が個人または集団として人生の目標を達成するための自己実現の技法を重視し、これを基礎とする。『ソーシャルワーク・トリートメント(Social Work Treatment)』の第5版で私が述べたように、クライアント中心理論と人間中心的手法は、現在では「価値を基礎とし、エビデンスに支持された」プラクティスと表現されるのがふさわしいかもしれない。カール・ロジャーズのクライアント中心理論と人間中心的手法の基礎にある原則の多くが、さまざまなサービス領域においてプラクティスの標準となっているエビデンス・ベースのインターベンションを提供するための不可欠な要素であるということは、ますます明白になっている。シルバシャッツとジョージ(Silbershatz and George, 2007)は、ロジャーズの発想の多くが、セラピーにおける技法の役割、セラピー的關係、セラピー的提携、サイコセラピーの経験主義的リサーチといった現在熱心に議論されている課題に関わるものだと述べた。ラコンブ(LaCombe, 2008)は2006年のカウンセラーに対するアンケート調査の結果を引用している。そこでは「過去25年で、あなたのプラクティスにもっとも影響を与えたのは何ですか」という質問に対し、2,598人の回答者のうち圧倒的多数が「カール・ロジャーズ」と答えている。」

4. Cognitive Behavior theory and social Work Treatment

認知行動理論とソーシャルワーク

レイ・J・トムリソン

バーバラ・トムリソン

「児童、青年、および成人の社会的、情緒的、行動的問題に対するトリートメントは、この数十年間で著しく進化した。認知行動トリートメントがさまざまな問題に永続的な好ましい変化をもたらすことを示すエビデンスが、続々と提示されたのだ。本章では、認知行動セラピー(CBT)について論じるが、その目的は主に3つある。1つ目の目的は、読者にこの手法のソーシャルワーク・プラクティスへの応用について概説することである。この概説は、「行動修正」として知られる1960年代後半に用いられた臨床的手法を基礎としたCBTの発展というコンテキストの中に位置づけられる。本書の旧版(Turner, 1996)以降、行動修正から行動セラピーへ、さらに現在のCBTの概念へと展開する大きな変化が見られた。この変化を加速したのは、主にリサーチ、プラクティス、トレーニングの発展と、説明責任の増大である。初期の行動学者は、クライアントと臨床家が観察可能な行動に注目することを重視していたが、上記の変化はこのような姿勢からの脱却を意味するものだった。観察可能性を重視するという原則は、臨床家に規律を与え、初期の臨床的リサーチ・モデルに体系的基礎をもたらした。しかし、認知的・情動的行動に影響を及ぼす多様な寄与因子を、より幅広く統合的に考慮すべきという強い要請には逆らえなかった。行動修正、行動セラピー、およびCBTは、セラピーの焦点としてクライアントの行動を重視するという点では基本的に一致している。一方で、CBTはクライアントの問題を定義し問題の改善策を決めるうえで、クライアントの考え方や信条も併せて考慮すべきとする。CBTの背後には、考え方を変えることができれば感じ方を変えることができるという発想がある。」

5. Cognitive Theory and Social work Treatment

認知理論とソーシャルワーク・トリートメント

Pranab Chatterjee and Suzanne Brown

「フランスの著名な哲学者であるルネ・デカルト(1596-1650)の「我思う、ゆえに我あり」(Descartes, 2014)という言葉は思想史に残る名言とされている。この言葉は、人間の思考、これを整理・分類する方法、思考の影響を受けたさまざまな形の行動という領域に人を導く。後に現代の社会科学において「認知理論」として知られることになるのが、この人間の思考とその結果としての行動に関する研究である。ソーシャルワークならびにその他の援助専門職はこの理論を個人、家族、グループ、コミュニティ、組織とのインターベンションに活用している。「認知」という言葉の辞書的意味は「知るプロセス」あるいは「知るための能力」である(Merriam & Merriam, 1957, p. 160)。「認知理論」という言葉は、人がいかに知覚し、思考し、さまざまな形の情報を処理し、これらに反応するかを理解するための技術と科学を意味するようになった。認知理論は社会学、人類学、社会生物学、心理学、生物学、社会言語学、そしてソーシ

ネットワークの一領域として始まった。これは、人がいかに推論、判断、決定をし、どのように問題解決に取り組むかについての理論である。そこには、さまざまな状況に対応するために役立つ概念を、人の心がいかに形成するのかという問いも含まれる。」

6. Constructivism: A Conceptual Framework for Social Work Treatment

構成主義: ソーシャルワーク・トリートメントのための概念的枠組み

Donald E. Carpenter and Keith Brownlee

「ソーシャルワーク・プラクティスの概念的枠組みとしての構成主義は比較的新しいものである。ソーシャルワークにおけるさまざまなプラクティスの視点やトリートメント手法には、その歴史の中で構成主義的な概念や原則が反映されてきたが、これが構成主義として認識されるようになったのは比較的最近のことである。しかし、構成主義という概念は、人間の思想において長い歴史を持ち、芸術、数学、文学批評、哲学、社会科学や行動科学、さらに関連する援助専門職など、さまざまな分野において表現されてきた。構成主義を、人間の行動との関連性において完全に精査しようとするならば、それだけで、哲学者による形而上学、認識論、オントロジーに関する込み入った議論と、心理学者による知覚、認知、学習の性質に関する研究にまで話がおよび、さらには、近年急速に発展している神経科学の分野の探求も必要となる。構成主義をここまで掘り下げることは、明らかにこの章の範囲を超えているが、ソーシャルワーク・プラクティスのための構成主義に基づく概念的枠組みを作る際には、これらの分野にも触れていく。ターナー(Turner, 2011)は、ソーシャルワークが採用する様々な理論展開へのアプローチを分類する中で、ソーシャルワーク・トリートメントに対する革新的な概念化を行う、さまざまな新しい理論的アプローチを見出した。本章で示すように、構成主義は、ソーシャルワークにとって比較的新しい思想体系であり、この専門職においては「非主流派」にとどまっており (McWilliams, 2015, p. 1)、哲学的-行動主義的-方法論的思想体系として具体的に特定されている。哲学的には、構成主義は現実と存在の本質(形而上学と存在論)、および、人間の知識の先天性と後天性(認識論)に関わるものである。」

7. Social Work Theory and Practice for Crisis, Disaster, and Trauma

危機、災害、トラウマのためのソーシャルワーク理論とプラクティス

Diane M. Mirabito

ダイアン・M・ミラビト

「危機とは「状況的、発達の、または社会文化的要因から生じ、通常の問題解決手段による対処が一時的にできなくなる、激しい感情的動揺」である (Hoff, Hallisey, & Hoff, 2009, p. 4)。パラドとパラド (Parad and Parad, 1990) は、この定義を基礎としてこれを拡張し、危機を「安定した状態にもたらされた混乱であり、良い方向あるいは悪い方向への転換点であり、人または家族の正常あるいは通常の機能パターンの混乱あるいは崩壊」と定義した (pp. 3-4)。これらの定義が示すように、危機はさまざまな形をとる。たとえば、家族の

突然の死、学校での銃撃、貧困、壊滅的被害をもたらしたハリケーンや地震、ホームレス、慢性疾患あるいは命に関わる病気と診断されること、失業、性的暴行、家族暴力あるいは家庭内暴力、親密なパートナーによる暴力、精神疾患、離婚、定年退職、身体的虐待および性的虐待、レイプまたは性的暴行、戦争で荒廃した国からの家族の移民、自殺、殺人等である。ソーシャルワーク・プラクティスの現場の中には、病院の緊急治療室や移動型危機プログラムなどのように、危機介入サービスを専門的に提供するものもあるが、あらゆるプラクティスの現場で、ほとんどのソーシャルワーカーが、さまざまなタイミングで、多様なクライアント集団の危機に対処する。」

8. Ecopsychology: Adding “Eco” to the Biopsychosocialspiritual Perspective

エコ心理学: 「エコ」を生物心理社会的スピリチュアル的視点に加える

デビッド・S・ディリゾウツ

David S. Derezotes

「人類は歴史上初めて、自ら作り出した生存に対する脅威を直視することを迫られている。我々が宇宙を探検し、地球をはるか上から見るができるようになるとともに、我々の故郷である惑星は一つの生態系であり、その資源は限られており、人間の活動により生じるストレスが増大していることが認識されるようになった。すべての生命を支える生態系に対する物理的脅威の増大は、個人および集団の心理に、安全、安心、持続可能な未来に対する脅威をもたらしている。我々の地球生態系に対する脅威は現実のものである。20世紀に、世界の人口は4倍になり、エネルギー使用量は16倍、水の消費量は9倍、大気汚染量は5倍、農地は2倍になった(McNeill, 2000)。地球温暖化は、大気汚染、土壌汚染、水質汚染、地域および地球規模の生態系の破壊、および動植物種の絶滅等の要因と結びついている。これらの要因はどれもが、およそ人為的なものである(McBay, Keith, & Jensen, 2011年)。地球温暖化は21世紀にも加速し続けており、地球の気温は年々、容赦なく上昇している(Kolbert, 2014)。科学者は、現在のペースでは、2100年までに年間平均気温は最大で華氏30度上昇する可能性がある」と推定している(McBay, Keith, & Jensen, 2011)。」

9. Empowerment Approach to Social Work Treatment

ソーシャルワーク・トリートメントへのエンパワメント・アプローチ

ジュディス・A・B・リー

ロンダ・E・ハドソン

Judith A. B. Lee and Rhonda E. Hudson

「今日、ソーシャルワーク・プラクティスのプロセスおよび結果としてエンパワメントが重要なのは、当然のことと考えられている。ソーシャルワーク・プラクティスにおいて、エンパワメントに関する議

論は 1970 年代後半に始まり、1980 年代を通じて流行した(Solomon, 1976; Pernell, 1986; Lee, 1989; Parsons, 1989; Cox, 1989; Gutiérrez, 1989; Mancoske & Hunzeker, 1989)。さらに、1990 年代および 21 世紀の最初の 20 年間を通じて発展し、米国および世界中で、プラクティスと理論の両方で盛り上がりを見せ、受け入れられ、現在もなお重要性を保っている。今や「エンパワメント」は世の中に定着した言葉であり、さまざまな意味(しばしば障害を克服することに関わる)で一般的に用いられている。さらに、この言葉はさまざまな分野の専門職、すなわち、ソーシャルワーク、教育、看護、心理、政治、聖職者と神学、経済、ビジネス等においても用いられている(Read & Laschinger, 2015; Biden, 2013; Argyris, 1998)。化粧品の訪問販売と女性のセルフエンプロイメントで知られるエイボン社は、現在、女性のエンパワメントを支援する商品を販売している。エイボン社はさらに、無限大記号をエンパワメントのシンボルとして用い、エンパワメントの観点から説明したうえで、「エンパワメント」ブレスレットや「エンパワメント」ペンダントを販売し、その利益の一部を家庭内暴力に苦しむ女性にサービスを提供する機関に寄付している。国内外の文献でも、貧しい人々、特に女性が経済的に自立できる場であるエンパワメント・ゾーンについて論じられている。」

10. Existential Social work

実存主義的ソーシャルワーク

ドナルド・クリル

Donald Krill

「ここ数十年間にわたる幻滅の中で再生した実存主義的世界観は、強化された人間化の視座から、貧困層やマイノリティの問題に効果的かつ柔軟に対処すべきことを主張している。ソーシャルワーク専門職に対する実存主義哲学の影響ははまだ明らかにされていない。1962 年に本件に関する最初の論文がソーシャルワークの文献に掲載され、1969 年、1970 年、および 1978 年にソーシャルワーカーによる 3 冊の書籍の中で、実在主義的な視座が論じられた。米国ソーシャルワーカー会議では、実存主義の話題が取り上げられることはほぼなかった。一方、実存主義的視点に精通しているソーシャルワーカーは、この視点が専門職の最も差し迫ったニーズに応えるものであることを強調する。すなわち、貧困層やマイノリティの問題により効果的に対処することへのニーズ、家族や個人との、現在により焦点を当てた、実験的な作業指向のワークへのニーズ、さまざまなトリートメント技法のより柔軟かつ折衷的な使用へのニーズ、人々に対する分類をやめることへのニーズや、セラピストがクライアントの価値を家族や確立された社会の価値に合わせようとするパターンナリストイックな取り組みを減らすことへのニーズ等である。実存主義的視座は、ソーシャルワーカーの現在の社会変革を伴う実験に重要な人間化の効果をもたらすとさえ考えられている。」

11. Feminist Theory and Social Work Practice

フェミニスト理論とソーシャルワーク・プラクティス

イブリン・ミリケン

Eveline Milliken

『『彼らの世界を変える：女性運動の概念と実践』の中でについて、シュリアータ・ボトゥリワラ (Srilatha Batliwala, 2008)はフェミニズムについて次のように説明した。

(***引用ここから)

それはイデオロギーであり分析の枠組みでもある……。過去 30 年間にわたる現状改革活動、アドボカシー、リサーチと、変化し続ける地政学的コンテクストの中で、我々が得たものと失ったもの、そして将来の課題について、深い洞察と経験が得られた……。我々が支持するのは今やジェンダーの平等だけではない。男女を問わず、一部の人々を、性別、年齢、性的指向、能力、人種、宗教、国籍、地域、階級、カースト、民族等により抑圧、搾取、周縁化するあらゆる権力の社会的関係を変えることである。

(***引用ここまで)

フェミニスト・ソーシャルワーカーにとってはやりがいのある時代だ。カナダ・ソーシャルワーカー協会 (CASW, 2008) の「ソーシャルワーク・プラクティスの対象領域」(p.1)には「人権、社会正義、ジェンダー平等のためのフェミニスト擁護の高まり」との記述がある。インターネットの登場、スマートフォンとタブレットの普及、メール、Skype、ブログを介した国際的コミュニケーションの容易さとコストの低さ、さらに送電網が広く行き渡っていない地域でもソーラー技術やワイヤレス通信を利用できることにより、フェミニストは世界中でコミュニケーションをとることができる。動画配信によってどこにでも教室を作ることができる。社会運動は、今やキッチンテーブルや職場で生まれるのではなくはなく、Twitter のハッシュタグにより作られる。#SayHerName は暴力に反対し、情報提供や動員を行っている。#BringBackOurGirls は、ナイジェリアの誘拐された女子学生 273 人の解放を要求している。#AmINext は、アボリジニの女性の殺害や行方不明に対する世界の関心を高めている。フェミニストのジャーナリストは、ネット上のジャーナル、ブログ、Web 出版を通じて独自のフォロワーを形成できる。Facebook、Instagram、Twitter、Whatsapp、Tumblr 等により、メインストリームのメディアが取り上げるに値しないと判断した内容も、世界中に配信できるようになった。」

12. The Four Forces: An Inclusive Model

4つの力: 包括的モデル

オーディーン・シェファード・カウリー

Au-Deane Shepherd Cowley

「メガ理論の構築に向けて(***中見出し):ターナー (Turner, 2011)は、「メガ」理論すなわち完全に包括的な理論を探求する中で、その重要な目標の1つとして、多様な理論を使い分ける能力を高めることの必要性を提唱した。彼は専門職的臨床技能と理論的明確さの構築を追求し、それにより「(クライアントと状況を理論に合わせるのではなく)理論をクライアントと状況に合わせる」ための

ガイドラインを臨床家に提供しようとした。ターナーは、さまざまな多くの選択肢が利用できるとき、その有用性を比較および評価することがいかに困難であるかを認め、コーリー (Corey, 1995) に賛同し、多様な理論がどのような点で類似しどのような点で異なるかを知るためには、複数の理論を比較する方法を見出すことが必要だと述べた (1995)。4つの力モデルは、上記の条件を満たす包括的なモデルであり、西洋心理学において歴史的に発展してきた4つの主要な理論を比較するための体系的なプロセスを提供する。第1の力である力動理論、第2の力である行動理論、第3の力である経験主義的理論、ヒューマニスティック理論、実存主義的理論、そして第4の力であるトランスパーソナル理論である。いくつかのチャートや理論的ガイドラインがすでに提供されており、心理学の多数の理論、モデル、さらに具体的なインターベンションの中から、セラピストが特定のクライアントまたは状況に役立つ、最も理論的基礎のしっかりしたインターベンションを選ぶ際に活用されている (Cowley, 1996)。4つの力モデルは包括的であり、ターナーのソーシャルワーク・トリートメント概論で長年にわたって取り上げられてきた理論的トリートメント手法は、すべてではないにしても、そのほとんどがこのモデル内において分類される。」

13. Functional Theory and Social Work Practice

機能理論とソーシャルワーク・プラクティス

キャサリン・M・ダンラップ

Katherine M. Dunlap

「機能理論はオットー・ランク (Otto Rank) により構築された初期のほぼ忘れ去られた理論である。機能理論では、決定論ではなく個人の成長が重視され、機関とクライアントの構造を活用してサービスの焦点、方向性、内容、および推進力が定義される。この劇的な話も今ではおおよそ忘れられてしまっているが、20世紀初頭のソーシャルワークのリーダーたちは、専門職がどのプラクティス手法を採用すべきかについて熱い議論を交わしていた。多くのソーシャルワーク専門職が医療専門職に倣い、ジグムント・フロイト (Sigmund Freud) が構築した精神分析の原則を採用する中で、ドイツの心理学者オットー・ランクが構築した機能理論の原則を採用したグループは少数派だった。学派間の対立は激しく、少なくとも1つの全国大会が怒鳴り声により中断された (Dr. Alan Keith-Lucas の個人的伝聞、1984年頃)。短期的には、精神分析学派が優勢だったが、機能主義的ソーシャルワークの原則は存続しており、現在も多くのプラクティス手法の基盤となっている。機能理論が現代のソーシャルワークに劇的な影響を及ぼしているにもかかわらず、教育者とプラクティショナーの多くは、現代的アプローチの基盤である機能理論に触れる機会が少ない。本章では、機能学派が現れた歴史的背景を要約し、その主な主張について解説し、応用を検討し、かつて強力だったソーシャルワーク・プラクティス手法の将来について考察する。」

14. General systems Theory

一般システム理論

ナンシー・リーデル・バウアーズ

アンナ・バウアーズ

Nancy Riedel Bowers and Anna Bowers

「文明が発展し続けてきた間、「システム」とそれが生存と社会の進歩にもたらす貢献は常に重要視されてきた。現在行われている、プログラム計画の策定、メンタルヘルスのインターベンション、およびシステムの変革等におけるコラボレーションに向けた取り組みを考えれば、今ほどシステム理論とそのソーシャルワーク・プラクティスへの応用を再検討するのに相応しい時はない。個人、家族、およびコミュニティについて、より大きなシステムというコンテキストの中で考えるのは、もはや当然のことである。それはメンタルヘルスの専門職にとって、倫理的・学術的プラクティスにおける本質的な部分である。ルートヴィヒ・フォン・ベルタランフィが 1986 年に書いたように、「製造業、商業、軍事の世界では無数の問題が発生している…そのために『システム・アプローチ』が必要になった」(von Bertalanffy, 1986, p. 4)。アコフ(Ackoff)はこの理論構築の必要性を支持し、「もちろん、システムは何世紀にもわたり研究されてきたが、新しい視点も加わった…システムを各部分の集合としてではなく、一つの実体として研究する傾向である」(Ackoff, 1959, p. 145)。「一般システム理論」(GST)の始まりは、1950年代のトレンドに呼応するものだった。本章では、「コラボレーション」という現在のトレンドをソーシャルワークとメンタルヘルスのプラクティスに応用するために、一般システム理論の複数の側面と、システム理論との関連性について概観する。」

15. Gestalt Theory and Social Work Treatment

ゲシュタルト理論とソーシャルワーク・トリートメント

エレイン P. コングレス

Elaine P. Congres

「ゲシュタルト:このシステムは、融合(confluence)、取り入れ(interjection)、投影(projection)、反転(retroreflection)といった境界の機能不全に焦点を当てることにより、自己の内面と外面をあわせた全体に対する認識を高めることを目的としたものである。ゲシュタルト理論は単なる技法の寄せ集めと誤解されることが多いが、それをはるかに超えた豊かさを持つ、実存主義哲学に深く根ざしたモデルである(Perls, 1992)。「全体性」を意味するドイツ語に由来するゲシュタルトという言葉は、人間の経験の全体的な性質を意味する。ゲシュタルトは、部分の単純な総和をはるかに超えたものと見なされる。ゲシュタルト・セラピーは、現在の状況における個人の経験である「図」に焦点を当てるが、その人の現在および過去の背景である「地」についても考慮する。今-ここを強調する一方で、クライアントが自身の現在の状況についてより深く理解できるように、過去の経験と関係を、今、精査するのである。」

16. Hope Theory and Social Work Treatment

希望理論とソーシャルワーク・トリートメント

アレクサンダーT.ポルガー

「希望(hope)という言葉はあまりに我々の日常に根付いているため、我々がこれに注目したり、この概念の正確な意味について考えたりすることはまずない。希望を人生の重要な側面として意識するようになって、我々はこの概念を不正確に用いがちである。たとえば、子供の結婚式で「彼らが幸せになることを望みます(I hope ….)」というように、我々はこの言葉に対する一般的な理解を前提とし、これをきわめて明白なこととして使用する場合がほとんどである。セラピー・プロセスでクライアントが希望をどのように経験するか、希望がどのように用いられるかに、カウンセリング専門職が注意を向ける度合いについても、ほぼ同じことが言える。大抵の場合、カウンセリング専門職は、クライアントが目の前にいることを、彼らがこれから受ける援助により人生が改善されることへの希望を示すものと解釈する。希望について多くの人が考え研究してきたにも関わらず、あらゆるヒューマンサービス分野の専門職の間で、希望は知識においてもスキルにおいてもあいまいな領域のままである。さらに、ソーシャルワーク大学院を含む、学部や大学院のカリキュラムにおいて、希望が中心的な研究テーマとなっていることを示す兆候はない。希望に関しては、我々のほとんどが、単に何を知らないのかを知らないのだと言っても過言ではない。しかしながら、希望の重要性に鑑みると、その意味は言葉を使う人によって異なるというような論法で片付けられるものではないことは確かである。本章では、希望に関する幅広い領域での考察と研究の長い歴史を探る。希望についての広範な見解を統合し、これを基礎に、希望は個人と環境の間の相互作用の機能として時間をかけて発展する生来の傾向だという前提について論じる。希望は、人生のさまざまな段階において異なる形で経験される認知発達の現象であり、その発生は環境により決定されると言われているため、ソーシャルワークの生物心理社会的視座と特に深い関わりを持つ。そのため、専門職にとつての課題は、希望の一般的な活用の仕方を、永続的に応用できる、よく考えられた意識的な焦点に変換することである。希望の活用の仕方が十分に知らされれば、個人、カップル、家族、グループ、およびコミュニティへのインターベンションの結果はこれに比例して改善されると言われている。」

17. Hypnosis and Clinical Social Work Practice

催眠と臨床ソーシャルワーク・プラクティス

エレイン・タナー

Elayne Tanner

「ソーシャルワークは今や、独自の知識体系を備え、広く一般に認知された、認定資格が必要とされる専門職である。ソーシャルワークは、個人の生活の生物学的、心理的、社会的側面を組み合わせたホリスティックな視座を持つ。そのため、ソーシャルワーク理論は、コミュニティ、文化、社会的地位、性別、性的アイデンティティ、人種、年齢などの影響も認識する一方で(Mullaly, 2010)、理論を構成する多くの側面が他の分野を起源とするものである。そのため、ソーシャルワークの視

座では、常に複数の観点をを用い、システム論的な見方で知識を検討する。「ソーシャルワークの先駆者たちは、人々の生活の社会的コンテキストを構成する、深く結びついた関係の重要性に最初に取り組んだ人々だった。このような豊かな伝統の中でも、ソーシャルワークは「環境の中の人」という視座を持つことで広く知られている(CASW, 2000, [http:// www.casw- acts.ca/ sites/ default/ files/ attachements/ Scope%20of%20Practice_ August_ 08_ E_ Final.pdf](http://www.casw-acts.ca/sites/default/files/attachements/Scope%20of%20Practice_August_08_E_Final.pdf))。ソーシャルワーカーは、この多面的でホリスティックな視座に基づき、さまざまなサービス提供方法を探求し、あらゆる理論や方法論の中から、個々のクライアントにとって最も適したものを採用する。このような姿勢が、臨床ソーシャルワーク・プラクティスにおける催眠の活用への道を開くのである。」

18. Life Model of Social Work Practice

ライフモデルに基づくソーシャルワーク・プラクティス

アレックス・ギッターマン

Alex Gitterman

「ライフモデルに基づくソーシャルワーク・プラクティス(原題: The Life Model of Social Work Practice)」の初版は、個人、家族、グループ、組織に対するプラクティス、ならびに、近隣やコミュニティのいくつかの側面に対するプラクティスにおける統合的手法について、概念化して説明しようとする最初の試みだった。統合的プラクティスについて記述し、説明するために、2つの概念的メカニズム(選択の程度と生きることに伴う問題(problems in living))が定式化された。統合的手法の概念化のみならず、グループを形成したり組織に影響を与えたりするために必要となる特殊な知識やスキルも提示された。生態学理論は、人と環境に同時に焦点を当てる概念的枠組みを提供した。初版では、基礎となる理論と、個人、家族、グループ、コミュニティ、組織、社会的ネットワーク等のさまざまなシステムレベルに固有の知識、さらには社会的・物理的環境の特性も識別された。初版では、「私的トラブル」と「組織的問題」の関係を説明する最初の取り組みも行われた。これらの新たな発想は、歴史的および哲学的な視座の中に位置づけられた。その後の16年間(1980～2006年)に、我々の社会とソーシャルワーク専門職には劇的な変化が生じた。ソーシャルワーカーは、貧困と差別による経済的・心理的影響の中で耐え抜こうと苦闘する、非常に脆弱なクライアントとワークを行う機会がさらに増えた。プラクティショナーは、AIDS、ホームレス、薬物乱用、慢性の精神障害、児童虐待、家族や地域社会における暴力がもたらす壊滅的な影響に対処していた。1990年代の悲惨さと苦悩は、1940年代から1980年代に経験したものと、質量ともに明らかに異なるものだった。「セーフティネット」となる資源が解体されていたため、この状況は多くのクライアントにとって耐え難いものだった(Gitterman, 2001)。このような厳しい現実の中で、ソーシャルワーカーには、より短い時間でより多くのことを行うことが期待されてきた。これまで以上に、専門職としての勇気、忍耐力、創造性、そして専門的手法とスキルの幅広いレパートリーを持つことが、現代のプラクティスには不可欠な要素である。これらの現代的な課題に対し、「ライフモデル」の増補改訂版(原題: The Life Model of Social Work Practice Second Edition, Germain & Gitterman, 1996)では、4つの主

要な精緻化により、このような広範な社会的変化に対応した。第 1 に、抑圧されたクライアントに的確に対応するために、ソーシャルワーカーは、ダイレクト・プラクティスだけでなく、コミュニティ、組織、および立法に影響を及ぼし変革する能力を構築しなければならない。「ライフモデル」の第 2 版では、個人、家族、グループを支援することと、コミュニティ、組織、立法機関に影響を及ぼすこととの間を、自在に行き来する方法とスキルを特定している。」

19. Meditation and Social Work Practice

瞑想とソーシャルワーク・プラクティス

トーマス・キーフ

Thomas Keefe

「瞑想:この何世紀も前に生まれた方法論が目指すのは、人々が相互作用と反応を観察できるようになること、思いやりのある選択ができるようになることである。自己観察により、過去と現在の問題、およびそれらに対処する方法が明らかになる。瞑想は、さまざまな文化を起源とする複数の主要な心理・哲学的システムと深い関わりを持つ、古くからある領域である。とりわけ、アメリカインディアン、中央アジアのスーフィー、ヒンドゥー教、道教、広範な仏教と一部のキリスト教の伝統は、精神の豊かさと個人の成長の源泉として、瞑想という形式を洗練させてきた。70 年以上前に、瞑想は西洋のサイコセラピストたちの注目を集めるようになり、最終的には西洋科学の合理主義・経験主義の伝統の精査を始めた(マインドフルネス瞑想の簡単な歴史については、Germer, Siegal, & Fulton, 2005 を参照)。近年、瞑想は操作可能になり、その神秘的な装飾が取り除かれ、さまざまなコンテキストでの検証が行われ、経験主義的な理解により豊かさを増した。現在、マインドフルネスや未分化の意識を強化する瞑想の一形式が、クリティカル・ソーシャルワーカーを含むサイコセラピストにより採用されていることが明らかになりつつあり、その有効性と応用に関する研究は増加の一途をたどっている。瞑想は、ソーシャルワーク・プラクティスにおいては補助的な方法である。それは自己統制と自己探求のためのメカニズムである。それはストレスを緩和し、問題への対処に役立つ。特定の問題や人に対するトリートメントにおいて、その有効性は経験的な裏付けを得つつある。さらに、瞑想は多様な文化的背景を持つクライアントとのワークに役立つ可能性もある。それでもなお、方法としての瞑想は、これを完全に記述・説明しようとする、ソーシャルワーク・トリートメントの根幹を成す複数の理論に対し多くの課題を突き付け、時には異論を提起する場合もある。本章では、瞑想の起源、妥当性、発展、および応用可能性について検証する。瞑想、特にマインドフルネス瞑想から着想を得た多くの有用なリサーチが行われ、その数はさらに増え続けている。本章では、これらを包括的にレビューすることはせず、初期と現代のリサーチを参照することと定める。」

20. Mindfulness and Social Work

マインドフルネスとソーシャルワーク

クリスティン・ビンドセイル

ケイト・キッチン

Kirstin Bindseil and Kate Kitchen

「我々はソーシャルワーカーのためのマインドフルネス・ワークショップを主催している。ワークショップの最初に、『マインドフルネス』と聞くと、何が頭に浮かびますか？」と質問し、回答をフリップチャートに一覧する。多少のためらいの後に「リラクゼーション、注意、ボディスキャン、レーズンを食べる、心を空白にする、呼吸、ヨーガ、今この瞬間」といった回答が集まる。参加者たちは自分の回答が正しいのか自信がない。彼らはマインドフルネスに関心を持ち、期待に胸を躍らせているが、いくぶん懐疑的でもある。ここに本当に新しいものがあるのか、自分たちが既に知っていて実践していることを単に言い換えただけなのではないのか、という疑問を参加者は抱いている。マインドフルネス・ワークショップでは、経験と情報を織り交ぜて、参加者がその答えを自力で見つけられるように促す。参加者は議論するだけでなく、マインドフルネスのプラクティス、すなわち、ボディスキャン、座位瞑想、歩行瞑想、ヨーガ、そして視覚と聴覚による認識等である。時間が経つにつれ、彼らは今この瞬間とつながり、このつながりを観察することで、思考が明確な形を失っていくことに気づく。彼らはしばしば、自分が静けさを楽しんでいて、自分自身のために、その時間を過ごしていることに気づく。彼らはしばしば、マインドフルネス・プラクティスの経験について、今この瞬間に溶け込んでしまうことへの不安を感じたと述べ、これが彼ら自身と彼らがケアを提供している人々にどのように役立ち得るかを、身をもって経験したと言う。」

21. Narrative Theory and Social Work Treatment

ナラティブ理論とソーシャルワーク・トリートメント

パトリシア・ケリー

マーク・スミス

Patricia Kelley and Mark Smith

「本章をデイヴィッド・エプストン (David Epston) と共にナラティブセラピーの基礎を築いたマイケル・ホワイト (Michael White) (1949-2008) に捧げる。(**斜体)ナラティブセラピーは 1980 年代後半に開発され、1990 年代に、家族セラピーや、個人・家族・コミュニティとのソーシャルワークの領域でとりわけ注目されるようになった。本章では、ナラティブセラピーについて解説し、その歴史のおよび理論的基盤を探り、それが既存のソーシャルワーク・プラクティスの理論と価値にどのように適合するかを説明する。ナラティブ・アプローチ:本章のナラティブ・アプローチに関する説明と考察の大部分が、それぞれオーストラリアとニュージーランドの家族セラピストであるホワイトとエプストン (White & Epston, 1990) の著作を基礎としている(二人とも元々ソーシャルワークの教育を受けており、エプストンはコミュニティ・オーガニゼーションの研究もしていた)。彼らがこのアプローチを開発したのは 1980 年代だったが、これが北米で普及したのは、1990 年に彼らの共著である『物語としての家族(原題:Narrative Means to Therapeutic Ends)』が北米で出版されてからであった。彼

らのアプローチには当時としてはかなりユニークな要素が含まれていたが、北米と欧州で同時に起こった理論とプラクティスの発展と連動する形で、彼らの研究は始まり、発展していった。彼らのアプローチは、一般的に、構成主義理論と社会構築主義理論の範疇に分類される。この範疇からは複数のモデルがほぼ同時に出現し、それらはすべて、多くの学問分野にわたって流行していたポストモダン運動の影響を受けて発展した(構成主義についてのさらなる論考についてはカーペンターとブラウンリーによる本書第 6 章を参照)。1980 年代には、テキサスのアンダーソンとグーリシアン(Anderson and Goolishian, 1988)、ミラノ(イタリア)のボスコロとチェキン(Boscolo & Checchin)、ミラノ派と共同研究した米国のペンとホフマン(Boscolo, Cecchin, Hoffman, & Penn, 1987)、同じくミラノ派とともに研究を行ったアルバータ(カナダ)のトム Tomm(1987)等が、これらの新たな構成主義・構築主義的アプローチについて論じている。シカゴのフリードマンとコムズ(Freedman & Combs, 1996)は、彼らの著書「望ましい現実の構築(The Social Construction of Preferred Realities)」でナラティブセラピーの理論とプラクティスを明確に概説することにより、この考え方をさらに普及させた。」

22. Neurolinguistic Programming Theory and Social work Treatment

神経言語プログラミング(NLP)理論とソーシャルワーク・トリートメント

G.ブレント・エンジェル

G. Brent Angell

「ソーシャルワーク専門職が始まって以来、ソーシャルワーカーは、さまざまな学派や専門家の知識、知恵、スキルを活用しながら、サービス対象者を支援し、彼らが直面する困難を軽減してきた。我々が個人や集団として、援助専門職の積極的役割を果たす中で、このような情報を応用し効果的に活用する能力には、ソーシャルワーカーに特有の深い共感性と創造力が反映している。我々は、クライアントが自らの知識、信念、行動のあり方を解釈し、これを修正しようとする際に、彼らの協力者となる。本章では「神経言語プログラミング(***斜体)」(NLP)について概観するが、これは、人が世界を知り経験していく過程で、その思考や信念が、自身と世界とのやり取りを形成する表現や行動として、どのように社会的に構成されていくかを分析する、革新的なプラクティス手法である。NLP は、人がどのように現実を構成するかという問いを基礎とするが、さらに、人が直接的あるいは間接的な経験をどのように整理し、暗号化し、読み解くかを考慮する。旅行者と同様に、誰もが、自身が触れた物事の意味を理解し、感覚的経験を通じてこれを学び取り、既に持つ知識や想像、経験と並置する。この理解は、神経心理学的パターン、あるいはマップと呼ばれ、生物的・心理的・社会的・精神的・物理的な環境における他者との交流の指針となる。NLP を用いるソーシャルワーカーは、各個人による他者や環境との関係の持ち方を、その人独自の表現と認識することにより、人がどのように感情、思考、行動を形成するかを理論的に説明することができ、人が将来どのように感じ、考え、行動するかを予測することができる。NLP プラクティショナーは、一つの方法として、クライアントに、感情、思考、身体感覚を用いた即興的なやり取りに参加させ、これにより「マップ」を

構成するための感覚データを見出そうとする。このようなマップは、セラピーにおいてクライアントが直面する課題を理解し予測するために有用である。脱構築のプロセスを通じて、マップは修正や差し替えを行うことができ、これにより、矛盾をはらみ予測も実行も難しい、各個人に独特な感じ方、考え方、行動様式を上書きするために使用することが可能になる。」

23. Oppression Theory and Social Work Treatment

抑圧理論とソーシャルワーク・トリートメント

スーザン・P・ロビンス

Susan P. Robbins

「抑圧:このアプローチでは、ソーシャルワークを、人の変革を起こす潜在能力を支援することにより、多くの人々の生活を支配している抑圧的な社会関係を変革する可能性を持つ社会制度と見なす。抑圧理論は、複数の異なる分野と理論的伝統から導き出され、パワー、特権、支配、階層化、構造的不平等、および差別に関わる幅広い問題を包含している。ただし、抑圧理論 (oppression theory) の基礎は多様であるため、抑圧理論群 (oppression theories) について話す方がおそらくより正確だろう。なぜなら、個々の理論はその主な関心事として、通常、抑圧のさまざまな異なる側面、あるいは特定の抑圧された集団に焦点を当て、それ以外は対象外としている場合が多いからである。抑圧理論は、その大部分において、社会学的コンフリクト理論、批判的社会理論、フェミニスト理論、およびソーシャルワーク・プラクティスへのエンパワメント・アプローチと同様の概念的枠組みを共有し、これらの枠組みが持つパワーと不平等に対する共通の関心を基礎としている。反抑圧的ソーシャルワーク・プラクティスは、これらの理論を応用し、主に社会的、政治的、経済的「構造 (***)」、ならびに抑圧を開始、維持、実行する社会的および心理的「プロセス (***)」に関与するものである。抑圧理論の最新の応用と、新たに登場した反抑圧的ソーシャルワーク・プラクティスという分野は、ソーシャルワーク専門職の社会正義実現に向けた長年にわたる取り組みに基づくものである。ハイノネンとスピアマン (Heinonen and Spearman, 2001) によると、社会正義は「すべての人々が社会資源に対して平等な権利を持ち、公正で平等な待遇を期待し、享受すべきであるという、抽象的で強く支持されているソーシャルワークの理想」である (p.352)。反抑圧的プラクティスが発展し明確化されたのは比較的最近のことだが、社会正義への関心は、初期および現代の急進的、進歩的、構造的、フェミニスト、および解放といったソーシャルワークの枠組みにおいて顕著である (Campbell, 2003)。社会正義の理想は、セトルメント・ハウス運動の取り組みや、これに伴う 20 世紀初頭の進歩的な社会改革アドボカシーにまでさかのぼることができる。この時代のソーシャルワーカーは、移民の貧困層、女性、子供たちの状況を改善するための社会政策イニシアチブに積極的に関わっていた。経済の崩壊とそれに続く大恐慌により拍車がかかった 1930 年代のランク・アンド・ファイル (一般労働者) 運動 (the Rank and File Movement) は、1920 年代にほぼ消えかけていた政治的行動主義の再燃をもたらした。この運動の関連ジャーナルである「ソーシャルワーク・トゥデイ (SocialWork Today)」は、進歩的な立法、労働組合の組織化、およびその他の、今

日急進的あるいは反抑圧的プラクティスと見なされている措置を提唱した (Gil, 1998; Reisch & Andrews, 2001; Wenocur & Reisch, 2001)。ソーシャルワーク専門職団体が反抑圧的な感情を反映した美辞麗句を公式に標榜し続けたにもかかわらず、数十年間にわたり、進歩的なソーシャルワークが再び現れることはなかった。一方、ライシュとアンドリュース (Reisch and Andrews) の指摘によれば、専門職団体は、社会正義の理想を唱道しつつ、現状を強化するプラクティスも奨励されていたという。これは驚くにはあたらない。なぜなら、専門職の大多数が進歩的なソーシャルワークの理想を保持していたことは一度もないからである (Mullaly, 2006)。このように、支配的な社会秩序を維持しようとする従来のソーシャルワークが、専門職の歴史の大部分を通じてソーシャルワーク・プラクティスの中心だった。1960年代の社会運動は、人々の生活に影響を及ぼす構造的要因に対する新たな認識と関心をもたらした。1970年代の急進的なソーシャルワーク運動は、貧困と不平等の削減に焦点を当てたネオ・マルクス主義の階級分析を取り入れ、構造改革および社会政策に影響を及ぼした。社会階級と経済勢力に関する特別な関心は、ソーシャルワーク・プラクティスへの唯物論的アプローチに見ることができる (Burghardt, 1996)。急進的ソーシャルワークの遺産を受け入れつつも、階級分析に焦点を絞ることに批判的な構造的ソーシャルワーク理論は、人種、階級、性別、性的指向、能力、および年齢に基づく不平等を含む、あらゆる形の抑圧を精査する広範な枠組みを提供している (Campbell, 2003; Mullaly, 2006; Rose 1990)。キャンベル (Campbell) は構造的ソーシャルワークを、反抑圧的スタンスを明確にする重要な進展として、認めている。その一方で、その後のフェミニスト、反人種差別、異文化、およびポストモダンの理論家は、反抑圧理論が彼らの特定の関心事に関わる問題に適切に対処できなかったという懸念を表明した。この批判に応じて、今日の抑圧理論は、抑圧の複数の側面と表現をより明確に取り入れている。」

24. Problem-Solving and Social Work

問題—解決とソーシャルワーク

マイケル・L・シアー

Micheal L. Shier

「H・パールマン (H. Perlman) が構築した問題解決理論は、支援的で焦点を絞った人間関係が持つ潜在力の中で、現実と課題を結び付け、クライアントの心理社会的問題に対峙する能力を足場としながら、これを強化する方法を模索するものである。

パールマン (Perlman, 1957) の問題解決手法は、援助を求めるプロセスを理解するための重要かつ時宜を得た代替的手法だった。彼女の基本的論点 (人、問題、場所、プロセス) を統合することで、ソーシャルワーク・プラクティス全般を理解するための包括的モデルあるいはフレームワークが得られる。ソーシャルワーク・プラクティスにおける問題解決に関するこの独創的な研究は、クライアントとソーシャルワーカーの相互作用のための既存の方法を理解するのに役立つ。しかし、人生の中で発生する問題へのクライアントの対処能力の教育と向上にある程度の焦点を置く心理社会的インターベンション手法の一般的な応用の域を超えたトリートメントについては、十分に論じられ

ていない。近年、問題解決が、ソーシャルワーク専門職あるいは他のより一般的なプラクティス手法（コミュニティを基礎としたソーシャルワークや、組織でのプラクティス等）におけるセラピー的インターベンションや予防との関わりにおいて探求されることはほとんどなくなっている。代替的手法として、ストレンクスおよび解決志向のアプローチへの注目が高まっているが、いずれもその基礎となるのは「問題解決」である。学際的な社会科学は、問題解決のセラピー的側面に関する最近の文献の増加に貢献している（関連する研究のレビューについては、Nezu, Nezu, & D' Zurilla, 2013 参照）。これらの議論の多くに、人とプロセスというパールマンが提起した論点に類似した基礎的な論点が含まれている。このような研究は、セラピー的インターベンションを必要とするクライアントとのソーシャルワーク・プラクティスに重大な影響を与える可能性があり、新しくソーシャルワーカーになった者が、ジェネラリスト・プラクティスを明確に理解するのに役立つ場合がある。本章では、カウンセリング心理学の研究における問題解決という前提、特にソーシャルワークのプラクティスおよび教育という 2 領域に応用される際の問題の位置付けに関わる論点について論じ、これら 2 つの流れがどのように交差しているかを精査する。」

25. The Psychoanalytic system of Ideas

精神分析の思想体系

エリザベス・アン・ダント

Elizabeth Ann Danto

「精神分析とジグムント・フロイトの話をするには、あらゆる批評家の間に論争を引き起こすが、ソーシャルワーカーの間でも同じことが起きる。しかし、喜びからトラウマに至るあらゆる人間の経験を処理するこの心のモデルは、無視できない歴史的な地位を獲得してきた。フロイトは才能ある著述家であると同時に、気さくな人物で、しばしばユーモアにあふれ、時に自虐的な態度も見せた。彼は、現在のようなテクノロジーの恩恵を受けることなく、神経学のキャリアを始めたが、彼の発見の大部分は、100 年を経てその正しさが裏付けられることとなった。フロイトの作品は現在も、20 世紀初頭におけると同様に、大きな影響を及ぼし続けているが、それはおそらく、これらが西洋文化に共鳴するからだろう。精神分析は、欧州の啓蒙哲学、フランスのシュルレアリスム、反ユダヤ主義、君主制、近代主義、ファシズム、そして最後に民主主義といった背景を考慮することにより、その全体像が理解できるようになる。リチャード・スターバ (Richard Sterba, 1898-1989) は、当時一介の医学生に過ぎなかったが、ウィーン精神分析学会での生活を叙情的に描いた彼の著作は、この発想の持つ真の力を呼び起こすものだった。スターバは、「黎明期においてフロイトのもとで働いた経験は、我々に未来を形作る重要な科学的・文化的プロセスに参加していると感じさせた (注 1)」と記している。現在我々が使用しているすべての「対話」セラピーは、クライアントが組織全体であるか、個々の成人、子ども、家族、グループ、コミュニティであるかを問わず、事実上、これと同じプロセスから派生したものである。」

26. The Psychosocial Framework of Social Work Practice

ソーシャルワーク・プラクティスの心理社会的枠組み

エミリア・E. マルティネス・ブローリー

パズ M.- B. ゴリータ

Emilia E. Martinez- Brawley and Paz M.- B. Zor

「ソーシャルワーク理論に関する書籍の中の1章を執筆することにやりがいなどないと思う人が多いだろう。ただし、ソーシャルワーク・プラクティスにおける心理社会的理論について書くことは例外で、これはソーシャルワーク自体について書くことと似通っているのである。心理社会的理論は、ソーシャルワーク・プラクティスの正に核心を成している。特にケースワークや臨床プラクティスにおいて、ソーシャルワーカーはクライアントと緊密に関わり、歴史上、ソーシャルワークを心理学、精神医学、その他のサイコセラピエ的アプローチと区別させてきた内的・外的側面を評価することができる。この意味で、それは文化研究でしばしば定義される「ナラティブ」を彷彿とさせるように思われるかもしれない。そこでは、「テキスト(***原文斜体)」が特定の性別、階級、人種、イデオロギーの中で、歴史上の時に位置づけられる(Denzin & Lincoln, 1994)。クライアントのストーリーは、心理社会的アプローチの基本ツールだが、その観察者は、話者の物理的、社会的、文化的位置づけを特定することになる(Kelley, 2011; Neimeyer, 1993; White & Epston, 1990)。言い換えれば、このストーリーが、クライアントの生物心理社会的側面を明らかにするのだ。心理社会的アプローチの初期段階は、慈善組織協会(the Charity Organization Society)の初期に遡ることができる。この時代の先駆者たちは、社会問題に対して、19世紀の父性主義に基づく「金持ちの慈善家」的アプローチでは不十分であることに気づいた。慈善組織やセトルメント・ハウスのメンバーが直面した深刻な課題は、あまりに複雑すぎて、純粹に個人的な観点から取り組むことは不可能なものだった。行政と医療専門職は、貧しい人々のニーズに対し、個人の問題に焦点を当てることで対応していたが、ソーシャルワーカーは、問題は彼らのジレンマだけでなく、トラウマを生じさせるような環境の力にもあることを理解していた。環境への意識は、さらなる説明やインターベンション手法さえも提供できる新しい「科学」への意識と同じくらい重要になった。人々の生物心理社会的要素が複雑に絡み合っていることは明らかだった。チャールズ・ダーウィン(Charles Darwin)と『種の起源(On the Origin of Species, 1859)』から、ハーバート・スペンサー(Herbert Spencer)の「ソーシャル・ダーウィニズム(social Darwinism, 1900年頃)」、エイブラハム・フレクスナー(Abraham Flexner)と彼の1915年におけるソーシャルワーク専門職に対する深刻な批判に至る、科学を重視する思潮の影響により、ソーシャルワーカーは、自らが常識に基づき収集している新しい科学的情報やその他の首尾一貫した情報を取り入れられる、汎用的なアプローチに焦点を当てるようになった。生物心理社会理論、枠組み、あるいは視座が登場するための機が熟した。」

27. Relational Social Work: A Contemporary Psychosocial Perspective on Practice

関係ソーシャルワーク：プラクティスに対する現代的な心理社会的視座

キャロル・トーソン

キャロライン・ローゼンタール・ゲルマン

Carol Tosone and Caroline Rosenthal Gelman

「ソーシャルワーカーとクライアントの関係は、ソーシャルワーク・プラクティスにおいて、その特質とは言えないまでも、中核的重要性を持つ。これは、創成期のソーシャルワークから本書で紹介している現代の多様なプラクティスに至るまで常に変わっていない。「科学的慈善」を提供した「友愛訪問」や、コミュニティにおける積極的行動主義を標榜したセツルメント・ワーカー (Hollis, 1964) といった先駆的なソーシャルワーカーは、特定の目標を達成するためにクライアントとの関係を育んできた。また、メアリー・リッチモンド (Mary Richmond, 1917, 1922)、シャルロット・タウル (Charlotte Towle, 1945)、バーサ・ケイペン・レイノルズ (Bertha Capen Reynolds, 1934) らによる初期のケースワーク理論と、精神分析における関係的側面との類似性を指摘した研究者もいた (中でも、Horowitz, 1998; Shephard, 2001)。また、他にも (例えば、Borden, 2000; Ornstein & Ganzer, 2005; Goldstein, Miehl, & Ringel, 2009 のように)、関係精神分析の原則は、ソーシャルワークのスーパービジョン (Ganzer & Ornstein, 1999, 2004)、および薬物中毒者 (Ganzer & Ornstein, 2008) におけるトリートメントや文化を異にするダイアドにおけるセラピー (Tosone, 2005) に応用されてきた。本章では、これらと対比し、拡張する形で、我々が「関係ソーシャルワーク」と呼ぶ臨床ソーシャルワークの一側面について検討する。関係ソーシャルワークは、上記のようなソーシャルワークの先駆者たちのビジョンから生まれ、現代の状況に即したプラクティスの要求に応えるために進化し続けているアプローチであり、その初期より、何が「関係」を構成するのかについて、独自の理解を深めてきた。我々は、「関係ソーシャルワーク」を定義し、その歴史的源泉をたどり、現代における心理社会的アプローチとして、具体的なプラクティスの相互作用的文脈における、クライアントと臨床家の間主観的・対人関係的側面を考慮しながら解説する。また、関係ソーシャルワークの中核的要素について、事例を用い、関係精神分析的概念との類似点と相違点を示しながら解説する。」

28. Relational Theory and Social work Practice

関係理論とソーシャルワーク・トリートメント

デニス・ミールズ

Dennis Miehl

「この理論は関係性を重視し、セラピー関係が持つ回復的要素を、変化に大きく寄与するものとして強調する。ここで自己は、相互作用の中で形成されていくものと考えられ、完成したものではなく流動的なものと見なされる。本章では関係理論について、過去 50 年間の多くの臨床的・精神力動的理論を基に発展してきた考え方の枠組みと捉える。古典的フロイト理論と決別した精神分析の思想家たちは、臨床家とクライアントの関係を理解するための、フロイト理論に代わる方法を提示す

るようになった。関係理論の発展は、明確に 2 つの段階を経ている。1 人による心理学と呼ばれていた理論から、2 人による心理学への発展である (Goldstein, Miehl, & Ringel, 2009)。(***) “one-person”/” two-person”を、「一人称の」「二人称の」と訳した例が散見されますが、意味的に違う気がして、定訳とまでは言えないと思われたので「1 人による」「2 人による」と訳しました。前章でも同様です。) 大まかに言えば、関係理論は、クライアントとワーカーとの間の相互作用を、両者の相互依存性を重視して理解する方法へと進化してきた。関係論者は、クライアントとソーシャルワーカーが、クライアントをエンパワーし、そのストレンクスと可能性を最大化できるような臨床的關係を、共同で作り出すと考える。専門職的關係において関係理論の原則を活用する臨床家は、セラピー關係における修復的要素を、変化のプロセスに大きく寄与する要素として重視する。さらに、関係理論は「コンテキスト内における關係性を精査することに焦点を当て、これをプラクティス理論にとって不可欠なものとする。ここでは、自己は固定的というよりも流動的なものであり、社会的・対人的な場や背景との相互作用の中で形成されるものと捉えられる」(Hadley, 2008, pp.205-206)。関係理論は、特に抑圧された人々とのワークに適したものである。なぜなら、関係理論では、クライアントの社会的アイデンティティが重視され、これがその人のアイデンティティ形成に大きく寄与するものと理解されているからである。ジェンダーの社会的構成について書いたフェミニスト学者 (Benjamin, 1988, 1998; Dimen, 2003) や、人種や階級について理論化した研究者 (Altman, 1995, 2000; Leary, 1997) が、関係理論に大きな貢献をしてきた。」

29. Resilience Theory and Social Work Practice

レジリエンス理論とソーシャルワーク・プラクティス

ロビー・ギリガン

Robbie Gilligan

「「レジリエンス」とは何か: レジリエンス (resilience) という概念は、ソーシャルワークや福祉の分野で徐々に認知度が増してきているが、これは、他の多くの分野における人々の取り組み (工学、物理的インフラの提供、地震安全計画、自然災害に直面した際の危機管理等) においても通用する概念である (Hayward, 2013; Chang, 2014, Bruneau et al., 2003)。また、社会学 (Lockie, 2016)、心理学 (Masten, 2001)、政治学 (Zebrowski, 2013)、老年学 (Windle, 2011) といった領域や、緩和ケア (Vanistendael, 2007)、コミュニティ開発 (Chaskin, 2008)、若年ホームレスのケア (Kidd and Davidson, 2007) といった、さまざまな福祉プラクティスの分野とも関連性を持つ。レジリエンスは、ソーシャルワークとの関わりにおいては、およそ「逆境に直面したときに、予想を超えて、より上手く対処すること」と理解することができる。他の多くの有意義な概念と同様に、レジリエンスも厳密に定義することは容易ではない。このような困難を伴う別の概念には「美」がある。「美」という言葉の価値や重要性を否定する者はいないだろう。しかし、何を「美」と見なすかについては、さまざまな見解や文化的な差異があり得る。美という言葉は、人の経験について語る言葉であり、人の経験を豊かにする言葉である。レジリエンスという言葉も、美と同様、理解や表現のされ方はさまざまかもしれない

いが、多くの文化圏で認識され得る、力強い何かを伝える力を持つと考えて間違いないだろう。レジリエンスという言葉は、福祉の分野で広く普及し、使われるようになってきているが、広く共有された厳密な理解はまだ存在しない。本パラグラフの冒頭の定義は、この言葉の意味の一部を伝えてはいるが、ある種の曖昧さも示している。これは、ある種の疑問を呼び起こす。すなわち「逆境」とは何か。逆境の強さや継続期間は重要なのか。「より上手く対処する」とは何を意味するのか。比較対象は何なのか、何と比べて、あるいは、誰と比べて、より上手く対処するのか。それは、その人が以前よりうまくやっているということ、あるいは、逆境に陥る前とほぼ同じ状態に復帰するということなのか。それとも、おおよそ同じ境遇にある同輩よりも上手くやっているということ、あるいは、同輩全般よりも上手くやっていることを言うのだろうか。“予想を超えて”という観念には、誰の見方が反映されているのか。レジリエンスという言葉は、まさに文字通り、多くの疑問を引き起こし得るものである。しかし、本章では、この用語が、実生活でそれがどのように働いているのか理解を深めようとする努力に十分に報いる、有意義な用語であることを読者に示そうとしている。この概念は、援助とソーシャルワーク・プラクティスの本質に重要な新たな光を投げかけるものなのである。リサーチ文献においては、レジリエンスに関するいくつかの点について、強いコンセンサスができつつあるように思われる (Vanderbilt-Adriance & Shaw, 2008)。例えば、次のような点である。レジリエンスは生まれ持った遺伝的特質ではない。レジリエンスは静的なものではない。状況の変化に応じて変わるものである。レジリエンスとは、特定の領域(例えば、教育の成果)に関わるものであり、ある人の総合的な(全体的な)成果に関わるものではないと考える方がより有益である。ある領域でのレジリエンスが他の領域にも適用できるとは限らない。」

30. Role Theory and Concepts Applied to Personal and Social Change in Social Work Treatment

役割理論と概念—ソーシャルワーク・トリートメントにおける個人と社会の変革への応用

デニス・キンバリー

ルイス・オズモンド

Dennis Kimberley

Louise Osmond

「ソーシャルワークは、生物学的要因、心理学的要因、社会的要因、およびそれらの相互作用に関わるサービスを求めて訪れる人々に対応してきた。彼らはこれらの要因により、個人的・社会的発達や機能が促進されたり、妨げられたりしている人々である (Kimberley & Bohm, 1999; Kimberley & Osmond, 2009; Shulman, 2012)。ソーシャルワーカーが寄与してきた多くの理論およびパラダイム (Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders [DSM- III to DSM- 5], American Psychiatric Association, 2013, pp.20, 488; Petrovich & Garcia, 2015) や、ソーシャルワーカーにより適用されてきた社会学習理論に基づくセラピー (自己決定理論やソーシャル・サポート・ソーシャル・ケア理論等) は、役割理論やこれに関わる概念を前提としていながら、役割理論を主要なモデルとして意識的に適用してはいない場合が多い (e.g., trauma- compromised functioning, Shulman,

2012, pp. 738- 752)。共通因子理論は、社会構造や関係プロセスを重視するもので、カウンセリング・セラピー等の社会的ケア・インターベンションを通じて、個人や社会の変革に貢献してきた。この理論は、複数の理論を基盤とするセラピー的变化の要因となる役割と関係のプロセスにおいては、個々の理論により適用される意味的に類似した概念ラベルとして好まれる用語は異なるかもしれない(例えば、個人的・社会的機能における「問題」「ストレス」)、セラピー活動の比較的共通のパターンが反映されていることを示している。専門職による援助のテーマ(ソーシャル・グループワーク、家族セラピー、パートナー・カウンセリング、支援的里親制度、依存症へのインターベンション、矯正への期待、メンタルヘルスの悪化、健康上の課題、期待されるライフサイクルの移行等)はすべて、役割機能、役割期待、役割緊張、役割葛藤、役割の曖昧性、役割過重、役割移行、役割の進化と退行といった問題の一つ以上に取り組んでいる(Williams, 2011)。これらの役割の副次的テーマは、権利、特権、社会的立場の格差のパターンや、アイデンティティ形成への影響と関連することが多い(「インディアン寄宿学校のサバイバー」、「専門職」)。社会正義の問題は、社会や専門職的プラクティスの中に現れるが、ここには社会的役割と社会的立場に結びついた権利と責任という意味が含まれている(例えば、女性と子どもの保護、社会的グループ作業における相互扶助の強化)。関連する抑圧の問題には、社会的役割機能と関連するニーズの充足を可能にすること(例えば、障害者)、個人と社会の発展を促進すること(例えば、虐待や搾取を受けた子どもの個人的・社会的機能の低下)、能力とレジリエンスを高め、社会的機能の最適化を可能にすること(例えば、「インディアン」寄宿学校のサバイバーたち)に対する障壁、不公平、機会の不平等という意味が含まれている。ソーシャルワーク・プラクティスのコンテキストにおける多様な脆弱性の問題には、個人的・社会的機能に影響を及ぼす問題、リスク、危害、満たされていないニーズという意味が含まれている(例えば、複雑なトラウマの被害者やサバイバー, Briere & Scott, 2015, pp.197- 2014; Shulman, 2012 参照)。同様に、多様な人間の潜在能力に焦点を当てることは、ストレス、レジリエンス、能力、潜在能力、自己実現を称え、支援することになる。これらにはすべて、役割機能の強化や変化という意味が含まれる(例えば、逆境を乗り越えて立ち上がる人間の精神的ストレス;Ungar, 2012 参照)。」

31. Social Learning Theory and Social Work Treatment

社会的学習理論とソーシャルワーク・トリートメント

ブルース・A・タイヤー

Bruce A. Thyer

「社会的学習:人間の行動の多くは学習され、変化するという前提のもと、オペラント学習、レスポナント学習、観察学習の知識を用いて、検証された倫理的な手順に従い、クライアントの行動を有益な方向に修正するものである。ソーシャルワーク・プラクティスの目的は、行動を変えることである。個人、カップル、家族、小集団、組織等との臨床プラクティスに携わるにせよ、監督、管理、コミュニティ・オーガニゼーション、政策プラクティスに携わるにせよ、最終的に重要なのは、人々の行

動を効果的に変化させることである。この目的を達成するために、我々の学問領域では、多過ぎるほどのアプローチが採用され、開発されてきたが、その中には、十分に練られた理論的指針に基づくものもあれば、そうでないものもある。プラクティスのために極めて広く使われているアプローチは、「行動主義的ソーシャルワーク」として知られており、次のように定義されている。専門職ソーシャルワーカーが、経験的に導き出された学習理論を基礎としたアセスメントとインターベンションを、情報に基づき活用すること。この理論の例としては、レスポナント学習、オペラント学習、および観察学習が挙げられるが、この限りではない。行動主義ソーシャルワーカーは、行動主義として知られる科学哲学を支持している場合もあれば、そうでない場合もある。(Thyer & Hudson, 1987, p.1)。この学習理論は、主にソーシャルワークの外で構築されたものだが、我々の領域に、およそ黎明期から組み込まれている。下の囲み記事 31.1 は、ソーシャルワーク・プラクティスに行動主義的指向がもたらしたポジティブな貢献が反映されていると思われる複数の個所を、1920年代にまで遡り引用し、掲載したものである。オペラント条件づけ(Reid, 2004; Schwartz & Goldiamond, 1975; Wong, 2012)、レスポナント行動(Thyer, 2012)、観察学習理論(Fischer & Gochros, 1975; Wodarski & Bagarozzi, 1979)といった分野別のレビュー(ソーシャルワークに携わる人々に向けたもの)は、これらの原則を、ソーシャルワーカーの活動の独自の側面に適合するように読み替える際に役立つ。上記の定義にあるように、行動主義的ソーシャルワークは理論に強く根差した方向性であり、行動的手法の活用を提案するソーシャルワーカーは、アセスメント、インターベンション、プラクティスを評価するためのアプローチの根底にある科学的理論を十分に理解している必要がある。サンデルとサンデル(Sundel and Sundel, 2005)は、ソーシャルワークの利用者に焦点を当てた社会的学習理論への優れた一般的な入門書である。」

32. Social Network and Social Work Treatment

社会的ネットワークとソーシャルワーク・プラクティス

エリザベス・M・トレーシー

スザンヌ・ブラウン

Elizabeth M. Tracy

Suzanne Brown

「プラクティショナーは、クライアントが孤立していることはほとんどなく、多くの場合、社会的ネットワークに囲まれているものであり、これが専門職による援助の取り組みを促進、無力化、代替、あるいは補完するということを認識している。本章では、社会的ネットワークと、これに関わる社会的支援という概念が、ソーシャルワーク専門職と、これに対応する現代のソーシャルワーク・プラクティスにおける社会的ネットワークを用いたアセスメントとインターベンションの発展にとっていかに重要であるかを明らかにしていく。社会的ネットワークのアセスメントを行い、活用するための知識とスキルは、マイクロ・プラクティスとマクロ・プラクティスを問わず、すべてのソーシャルワーク・プラクティショナーにとって重要だと我々は考える。最初に、基本的な用語と概念の定義から始める。次に、社会的

ネットワークの概念が、ソーシャルワーク・プラクティスの起源や使命といかに密接に結びついているかを精査する。社会的ネットワーク分析の発展、ならびに、社会的ネットワークを用いたアセスメントとインターベンションがソーシャルワーク専門職に加わったことを解説し、その後、プログラムの例を紹介しながら、社会的ネットワークの応用の範囲と種類を説明する。そして章末において、現在の問題点と将来への課題について論じる。」

33. Social Work Practice in the Time of Neuroscience

神経科学の時代におけるソーシャルワーク・プラクティス

ロバート・J・マクファーデン

Robert J. MacFadden

「ソーシャルワークは何十年もの間、生物心理社会的視座に献身的に取り組んできたが、一部の例外を除いて、この視座の生物学的側面を専門職が受け入れたというエビデンスは存在しない (Saleebey, 1992)。ソーシャルワークが、プラクティスと教育の両面において焦点を当ててきたのは、ほとんどがその心理的・社会的側面だったのである。神経科学と神経生物学が新たにもたらした知見は、最近になってソーシャルワーカーの注目を集めるようになり、この視座を我々の専門職的な知識基盤、リサーチ、プラクティスに組み込むための取り組みが始まっている (Applegate & Shapiro, 2005)。ソーシャルワーカーのローズマリー・ファーマー (Rosemary Farmer, 2009) は、このような脳への注目を、我々の専門職にとっての「ミッシング・リンク (欠けていた部分)」と捉えている。この新しい知識を得ることで、我々の専門職的視座が、増加の一途をたどる神経科学への注目およびこれに関する知見に見合ったものになることが期待できる。神経科学的視座は、今世紀のソーシャルワーカーにとって最も重要な新しいパラダイムの 1 つである。それは、我々の専門職と他の専門職、特に医療に関わる医師と看護師以外の専門職をより密接に結びつける共通言語と理解を提供することを約束するものである。脳科学は、心、身体、脳、そして人間関係を重視し、ソーシャルワークのようなシステム論に基づく専門職にとって魅力的な、ホリスティックな方向性を示している。

脳に焦点を当てることで、我々の知覚、感情、思考、行動のすべてが脳を基盤としていることを思い知らされる。脳がどのように進化し、どのように機能しているかを理解することにより、人間の基本的性質について、明るい展望と課題の両方を含む洞察が得られる。ソーシャルワーカーという言葉の「ソーシャル」の部分は、我々の存在にとって人間関係が不可欠であるという我々の専門職の認識を強調している。同様に、神経科学は、人間関係がいかに我々の脳、心、そして身体の基礎をなしているかを明らかにしてきた。対人的なつながりは、神経間のつながりの形成を促す。我々の脳は、生後すぐの時点では未熟であり、相当の「組み立て作業」が必要とされる。人間関係は我々の脳の形成に不可欠なのである。乳幼児期には、両親との相互作用が我々の脳の成長を助け、それは同時に自らの価値や他者の価値を定義するのに役立つ。両親の脳は人工装具のように、乳児が自ら情動のコントロールができるようになるまで、その手助けをするのである。」

34. Socially Constructing Social Work

社会的に構成するソーシャルワーク

ダン・ウルフ

Dan Wulff

「専門職あるいは学問領域としてのソーシャルワークについて、社会的に構成された、時と場所を経て盛衰する一連の活動と考えることは有用である。今日のソーシャルワークは、過去に論じられ、実践されてきたものとの類似性を保ちつつ、同時に、我々が生きる今という時代や状況を反映した調整が行われ、形と輪郭が与えられてきた。ソーシャルワークは、ソーシャルワーカーが「する」ことを典型化するような「パフォーマンス」を通して明らかにされる (deMontigny, 1995; Hall, 1997; Parton & O'Byrne, 2000)。ソーシャルワークを「社会的に構成する」とは、社会、コミュニティ、そして個人が、ある特定の目標や任務を達成するためにソーシャルワークを創造／発明することを意味する。では、なぜソーシャルワークとその成果を社会的に構成されたものと考えることが有益なのか。

ソーシャルワークとは、変化の激しい世界に生きる人々やコミュニティとの関係において、常に変化するプラクティス条件に対峙し続けている、信念と活動の集合体である。このことを思い出すことにより、我々は、クライアント、コミュニティ、組織、その他あらゆるレベルのソーシャルワーク活動において、謙虚であり続けることができる。また、これを思い出すことで、我々は、可能な限り有用で生産的な存在になるための姿勢をとり、これを保つように促される場合もある。ストーチとショットター (Storch and Shotter, 2013) は、彼らが「豊富な資源による準備 (poised resourcefulness)」と呼ぶ姿勢について、次のように説明することで、これを雄弁に表現している: それは、我々が専門職的プラクティスの中で新たに遭遇する固有の状況のそれぞれに、そこで出くわす可能性のある、あらゆる偶発性、当惑、見当違い、困惑、感情、情動等に対し、関連する幅広い対応方法を備えて、いわば「準備万端」で臨む能力である。(p. 16) (***) 引用ここまで) ストーチとショットターは、クライアントやコミュニティと、完全には予見できない形で相互作用をするための最大限の準備をしておくように提言することで、関係性の重要性を強調している。我々のプラクティスは、さまざまな場所、コンテキスト、時代において行われる。そのため、我々のプラクティスのやり方をどう評価するか、何を変えることができるのか、どのようにソーシャルワークを行う新しい方法を創造し得るかが課題となる。共に生きるという課題をよりよく満たすための柔軟性と適応性は、ソーシャルワークが長い間奉じてきた価値である。常に変化し続ける状況の中で、このような価値を明確にし、実行していくさまは、我々が愛情を込めて「ソーシャル」ワークと呼ぶものの最も偉大な要素の一つかもしれない。」

35. Solution-Focused Theory

解決志向理論

モー・イー・リー

Mo Yee Lee

「解決志向ブリーフセラピー (Solution-focused brief therapy, SFBT) は、クライアントに問題に対する責任を負わせるのではなく、解決に対する責任を持たせるものである。SFBT は、ストレングスの視座に基づく、時間を限定したアプローチで、「プロブレム・トーク」ではなく「ソリューション・トーク」に焦点を当てることで、比較的短期間にポジティブかつ長期的に有効な変化が生じると仮定する (Berg, 1994; de Shazer, 1994; de Jong & Berg, 2013; Lee, Sebold, & Uken, 2003)。クライアントの解決策、能力、ストレングスに焦点を当て、強調することを、ポジティブ・シンキングのようなナイーブな信念と同一視してはならない。トリートメントにおいて「解決策とストレングス」という言葉やシンボルを用いる際に解決志向アプローチを選択することは、システムの視座 (Bateson, 1979)、社会構成主義 (Berg & Luckmann, 1966; Neimeyer & Mahoney, 1993; Rosen & Kuehlwein, 1996)、精神科医のミルトン・エリクソン (Milton Erickson) の研究 (Erickson, 1985a; Erickson, 1985b) の影響を受けたものである。このプラクティス・モデルは、比較的最近開発されたにもかかわらず、現在では多様なソーシャルワーク・プラクティスの現場で広く採用されている。その一因として、解決志向セラピーの前提やプラクティスの方向性が、ソーシャルワークの価値や、ソーシャルワーク・トリートメントにおけるストレングスとエンパワメントを基礎としたプラクティスに適合していることが挙げられている。」

36. Task-Centered Social Work

課題中心ソーシャルワーク

アン・E・フォーチュン

ウィリアム・J・リード

Anne E. Fortune

William J. Reid

「課題中心ソーシャルワークは、1970年代にローラ・エプスタイン (Laura Epstein, 1914-1996) とウィリアム・J・リード (William J. Reid, 1928-2003) により開発された、時間を限定した問題-解決型のソーシャルワーク・プラクティス・アプローチである。彼らは、心理社会的理論基盤と期間限定トリートメントの有効性に関するリサーチ・エビデンスから出発し (Reid & Shyne, 1969)、インターベンションをテストし、結果のアセスメントを行い、インターベンションを改良し、再テストするという、リサーチと開発 (R&D) のアプローチ (Thomas & Rothman, 1994; Thomas, 1984) を採用している (Reid & Epstein, 1972)。課題中心ケースワークの最初の定式化は、ホルリス (Hollis, 1964) の精神心理社会的技法、パールマン (Perlman, 1957) の問題-解決プロセスとしてのケースワークという視点、スタット (Studdt, 1968) のサービスの焦点としてのクライアントの課題という考え方に大きく依拠したものだ。リードとエプスタインは、課題中心モデルを、多様な資源からの理論的・技術的貢献を取り入れることができる、開かれた多元的なプラクティス・システムとして設計した。現在プラクティスが行われている課題中心ケースワークは、人間の機能に関する特定の理論に縛られない。それはむしろ、

価値前提あるいは基本特性の核心、クライアントがどのように変化するかについての基本的仮説、構造化された問題-解決活動を含む 3 段階構成のインターベンション、および特定の問題に対処するための戦略案を提供する。本章では、臨床プラクティスにおける現在の課題中心システム、すなわち、個人、家族、グループに対する課題中心プラクティス、およびクライアントのために行うケースマネジメントについて概説する。この概説では、プラクティス・モデルの基礎となる主要な理論的前提や、クライアントとのワークの指針となる問題-解決と課題計画の活動というモデルそのもの、および特定の問題に対する課題戦略について論じる。さらには、この概説では複数のクライアントがいる場合の追加的考慮事項、適用範囲と限界、課題中心モデルの有効性に関するリサーチ・エビデンス等についても論じている。」

37. Trauma-Informed Social Work Treatment and Complex Trauma

トラウマ・インフォームド・ソーシャルワーク・トリートメントと複雑性トラウマ

デニス・キンバリー

ルース・パーソンズ

Dennis Kimberley

Ruth Parsons

「感情的苦痛、トラウマ、複雑性トラウマへのインターベンションの歴史的コンテキスト:これらの神経症の状態に最も近いのは、戦争により頻発するようになった病気、いわゆる外傷性神経症である。戦争以前にも、鉄道の衝突事故や生命を脅かすような恐怖を伴う出来事の後には、このような症例があった…。この外傷性神経症は、外傷となった災害を経験した人が、それが発生した瞬間にとどまり続けることに根ざしたものであることを明確に示している。このような患者は、夢の中でトラウマ的状况に生きることを定期的に繰り返している。彼らにはヒステリー型の発作があり、それが分析可能な場合、その発作が生じている際、彼らがトラウマ的状况に完全に入り込んでいることに近い状態にあることを知ることができる。このような患者は、あたかも今もトラウマ的状况から抜け出せていないかのようであり、それがまだ克服できていない課題として目の前にあるかのようである…。

トラウマ的体験は、きわめて短期間のうちに、与えられた刺激の強度を非常に大きくすることができるため、その吸収や同化は、もはや通常的手段では行えないのである。」

(第5回ソーシャルワーク研究会公開ZOOMレビューの資料から抜粋)